
魔法少女リリカルなのはStrikers～ずっと・・・君と・・・～

ハルジオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers〜ずっと・・・君と・・・

【Nコード】

N2439T

【作者名】

ハルジオン

【あらすじ】

新暦0075年

ミッドチルダ北部

陸戦魔導師訓練校入学式の日

そこにいる1人の主人公と2人のヒロインがいた。

そこには・・・

プロローグ

「これ…ちょっと前…話なんだけど…」

戦慄の戦場の中

逃げ惑う人間で一杯の中

一人の男の子が取り残されていました。

その男の子は叫びました。

〈助けて〉と

ですがその子はまだ小さかったので声もまともに聞こえません。

その為村人にも気付かれぬまま時間が経ちその子は意識が朦朧としてきたのです。

……………そして……………

次に目が覚めたのは何処かの病院？でした。

なにがなんだか解らず、取り敢えず生きてることを実感したその子は、ひとまず
安心したようでした。

すると、ドアが開き

「あ、目覚めたのね」

と、女性の声が聞こえてきたのです。

「お名前：言える？」

そう女性が聞いてきた。

「うん。僕の名前は――」

プロローグ（後書き）

読んだ人はぜひ感想をコメントしてくれると嬉しいです。

第1話「ルームメート」

「試験をクリアし志を持って本校に入学した諸君らであるからして
……」

「…なげえ…」

おっさんの話が長く続く中俺は早くルームメートが誰なのか知りたくてウズウズしていた。

ルームメートは女の子かな？

女の子だったら良いなあ。

とか妄想してみたり、男でも美少年ならまだギリギリセーフだからな！

「以上！解散！一時間後より訓練に入る。」

「「はい！！！！」」

そう言って俺はルームメート探しを始めた。

l l s i d e

「ふふ……新人さんたち皆元気ですね。」

金髪の長い髪の女性が言った。

「ええ 今年も元気な子達が揃ったわ。」

「7年前のあなたたちに負けず劣らずのやんちゃな子達もいるわよ。」

対応しているのはなんと、その訓練校の学長だった。

「はい。」

「まあ貴女となのはたった三ヶ月の短期プログラムだったけど。」

「その節はお世話になりました。」

どうやら7年前にこの人と訓練をしたようだ。

〈コンコン〉

「失礼します。」

っと入ってきたのはいかにもメカオタ眼鏡の女性と、年は九才から十才位の男の子だった。

「あ！どもです。本校通信士科卒業生、シャリオ・フィニーノ執務官補佐です

！」

「知ってるわよシャリー。あなたもやんちゃだったから。それにそちらは……

」

「はい！エリオ・モンディアルですっ！」

「今日は見学の許可をいただきましたありがとうございます！」

「訓練校のこと色々勉強させていただきましたっ！」

「はい。しっかり勉強して行ってね。」

学長は笑って言った。

Inside了

「各員仮割り当ての部屋へ移動」

「二人や三人部屋のルームメートは当面のコンビパートナーでもある。」

「試験と面接の結果から選ばれた組み合わせだ。円滑に過ごせるように努力する
ように！」

「えーっと俺の部屋はーっと」

「「32号室……」」

三人の声がシンクロした。

しかも二人とも女の子じゃん！

ラッキー！！

って一人はこいつかよ。無視無視

早速挨拶しなきゃ!

と思ったらオレンジ色の髪の子が話してきた。

「あんたたちも32号室?」

「あ、はいっ!そうです!私スバル・ナカジマ12歳です!」

「俺はティグレ・イルシオン14歳だ。よろしく」

「後それから…君、俺と付き合ってよ!」

「……………はい?……」

「もうティグレだめでしょ!誰でも彼でもナンパしちゃ!」

「なんだスバルいたのか?全然気が付かなかった。」

「まあ良いやで貴女のお名前は?」

「ティ…ティアナ・ランスター13歳です。」

「ティアナか…良い名だ!これからよろしくな。」

「正式な班とコンビ分けまでの仮コンビですけどね。」

「だが当面は俺達三人はパートナーだからな、仲良くやろうぜ。」

「荷物置いて着替えて行こう。準備運動しっかりしたいですから。」

「まあそれには俺も同感だな!んじゃま行きますか!」

愛想のないやつだな。いや、待てよ。ひょっとしてこれはいわゆる
「ツンデレ」

というやつなのか？ハッハッ！萌えてきたぜ！それを攻略するのが
まず俺の仕事
のようだ！楽しくなってきたぜ！

「ああ後、別に敬語なんて使わないでくれよ名前もティグレで良い
し」

「俺も貴女のことにはティアナって呼ぶからな。」

「はい。…分かりました。」

どこことなく納得のいかないティアナに対しさっきからオドオドして
いるスバル。

「おいスバル！何でそんなにオドオドしてんの？もしかして恐いの
？バカなの？

それとも漏らしそうなのか？なら速く言った方ー」

と、冗談半分で言っていたら…

スパーン！！！！

「……………痛てえ……………」

すごい勢いで殴られた……………何で？

そうこう言っている内に着替えをすぐに済ませ、あいつら二人の着

替えを待つて

俺たちはすぐに朝練の為に練習場へ向かった。

エリオ・シャリオside

「ふえ！広い練習場ですねー」

「うん。陸戦訓練場だからね。」

「ここは陸戦魔導師さんの訓練校なんですよね？」

「そうだね！」

「ほとんどの戦闘魔導師のスタート地点で今も一番数が多い、空を飛ばずに戦う

魔導師たちが学ぶ場所」

「フェイトさん達みたいに先天資質でA以上とかそういう人を除けば飛行訓練はか

なり大変だからね。空戦魔導師になる場合でも陸戦魔導師として訓練や実績を積

んでから……って場合も多いんだよ」

「あ、もちろんどっちが偉いとかってことはないんだよ。」

「はい。わかってます。陸も空もそれぞれの場所でそれぞれに働いて助け合っ

てるからこの世界を守れるんだって！フェイトさんに教わりました！」

「うん。偉い偉い！あ、朝の訓練始まるね！」

エリオ・シャリオside了

「では、一番から順番に訓練用のデバイスを選択。ミッド式は片手杖か長杖、近代ベルカ式はポールスピアのみだ。」

次々に訓練用デバイスを取ってくる人たちに対し俺達は…

「スバルだっけ？デバイスは？」

「あ、私ベルカ式でちょっと変則だから……」

「お前はナックルリボルバーで行くのか？」

「そうだよ。」

と、言っで次々に取り付け始めるスバルに対し何か俺に言いたそうな顔をしているティアナ

「ティアナはどんなデバイスなんだ？」

「私も自前、ミッド式だけどカートリッジシステム使うから…」

「そう言うティグレ…さんは？」

「よくぞ聞いてくれた。だが、別に俺は何でも使えるんだよ。だが今回は俺も自前だよ。」

そう言って腰から二丁の銃型のデバイスを取り出す。

「ティグレはまた、二丁拳銃なんだね。」

「まあな。もう一個の方を使うとちょっとここには居られなくなるからな。」

「「…へ…へえ……」」

え！何かまずいこと言った俺？何で二人して固まっちゃってんの？

「ま…まあ他に自作持ち込みはないみたいだし変則組で組まされたんでしょうね。」

Inside

ミットチルダ西部陸士108部隊 隊舎

同 隊長室

「そろそろ入学式も終わった時間か」

「スバルはちゃんとやれてんのかねえ……」

渋いおじさまがしゃべってる。

「そうですね。ちょっと内気な子ですから心配は心配なんですけどそこにはティ

グレも居るわけですし多分心配は無いかと思いますけど。」

「なんだ？あの若造もあそこに入ったのか？あいつも物好きだなあ。あいつなら

別に特待生でも行けるんじゃないか？」

「多分ティグレは特待生には女の子が少ないって理由でしょうね。」

「あいつもその癖を治せば普通に強いんだけどなあ。」

呆れながら言うおっさん。

どうやらこの二人もティグレの事を知っているようだ。

「しかし、おまえといいスバルといい俺あ局員になんぞしたくはなかったんだがなア……」

「すみません。でもスバルはあるときから夢と目標を見つけてくれましたし……

母さんもきつと喜んでると思うんです。」

「だといいんだがな」

「はい。」

l l s i d e 了

第2話「訓練」

「次！ Bグループ ラン& p; シフト！」

「障害突破してフラッグの位置で陣形展開…分かってるわよね？」

「うんっ！」

「……………」

「あのー聞いてますか？」

「ん？ ああすまんな考え事してた。」

「ならいいんですけど……」

「ティグレさんは前衛ですか？ 後衛ですか？」

「んーどっちが良い？」

俺は悪戯っぽく笑みを浮かべてみた。

「どういう事ですか？」

「まあ簡単に言えば……」

と同時にティグレのデバイスに何かがまと割りついた感じになった。

「あの？ これは？」

「ん？ああこれはな……っと！そろそろ俺らの番だな！」

「じゃあスバルは前衛よろしくな。ティアナは中衛な、俺は後衛やるから。」

「了解……！！！」

「32……セット！」

キュイイイイイン

「あ、忘れてた。スバルは……」

ゴーーーーー！！

ドドーーーー！！

ギョイイイイイイン

「フラッグポイント確保ッ！………え？」

「32番！！馬鹿者何をやっている！」

「安全確認違反！コンビネーション不良！視野狭窄！腕立て50回ッ！」

「うっせえな……！黙っとけや禿茄子が……！いちいち細々言いやがって……！耳障りなんだよ……！カスが……！」

「お前！教導官に何て態度をしてるんだ！どうなるか分かってるのか？（怒）」

「知るか！そんなの！どうなるのか教えてほしいもんだね？」（笑）

「そんなもんも分からのか？そんなもん退学に決まってるだろ！」

「デメエに言われて退学なんてしたくないね！お偉いさんでも出してくれないと

な！」

「ぬぐぐ…調子こきやがって！お前ちよつと来い！」

そう言って俺を連れ出した。

「スバルにティアナ、すぐ戻ってくるから！」（笑）

「「は…はあ…」」

その後俺は学長室に呼ばれた。

「失礼しま〜っす！……………わわわ〇れもの……………ごゆっくり
！！」

俺が見たものは学長とその隣で話している金髪の女性だった。

「こら！待ちなさい。」

おばはんは怒られちゃった。

「い、いや〜今お取り込み中かなあと思ひまして、」

「貴方のためにわざわざ待ってもらったんです。」

「俺のため？なぜそんな面倒なことを？」

「貴方をこの人に預けようと思って。」

このババアは何を血迷ってんだよ。それにちょっと気になることもあるし探りで
もいれてみるか？

「…………それは、あれですか？兄貴のところへ帰れとそう言いた
いんですか？」

「…………いえ、違います。」

いきなり割り込んできて金髪の女性が話してきた。

「貴方を私の親友の教導官に預けます。勿論ここは退学ということ
にはなります
が……そしてそこで貴方は私の親友や仲間たちと一緒に訓練をして
いただきます。」

「

成る程そういうことか。やっと話が見えてきた。

そこで俺を鍛えて今後の戦力になってほしい……みたいな感じか。

「俺へのメリットは？」

「貴方をどんな敵にも対応できる魔導師にします。」

「デメリットは？」

「貴方を強制的に新しくできる所に入隊させます。」

「そこに女性は何人くらいいますか？」

「私達隊長メンバー全員女性です。」

「よし！じゃあ行こう！」

「……………回答が早いですね。」

「まあね。隊長方が全員女性なら俺はハーレムエンドを目指すだけですから！」

「ま、まあ決まったなら明日の午前中に迎えに行きますので。」

「りょーかいしたっす。」

「では、明日」

スバル・ティアナside

「ティグレ大丈夫かなあ？」

「まあ相当キレてたみたいだったけど。」

「凄く心配だなあ。」

「そういえばあんたとティグレはこういう関係なの？」

「え？ああそれはねえ…私のお父さんの所で働いている部下の弟らしいよ。物心

ついた頃から一緒に遊んでたからよく覚えて無いけど。」

「へえ、だからあんなに仲が良いんだ。」

「ふい、やっと終わったぜ。」

スバル・ティアナside了

「で、どうだったの？ティグレ。」

「ん、取り敢えずここを俺は退学らしい。」

「……………え？えー！！！！！！！？」

「まあそういうことだ。」

「いつ？いついなくなっちゃうの？」

「ス、スバル！？そんな泣くなって、すぐまた会えるって！？お、おいティアナか
らもなんか言っちゃってくれよ」

「いえ、私は何も言うことはありませんので。」

冷たいな………だがその冷たさが逆に萌えるぜ!!

「うわ、スバルそんなに抱きつくなくて。」

「だ、だつで、ティグレが…ティグレが…うわ…ん。」

ヤバイスバルの胸が当たって俺が倒れそうだがそれも良いかも。

「あゝ、此処じゃあ何だから速く部屋に戻るぞ!」

「それもそうね。こんなロビーで泣かれても困るし。」

はあ、こいつの先が思いやられるぜ。

続く

第2話「訓練」(後書き)

自分は不定期に出しますのでよろしくお願いします。

第3話「新しい場所」

俺が退学と言われてから次の日。

「本当に行っちゃうの？」

泣きそうな顔で言ってくるスバル

「当たり前だろ？俺だって強くなりたいんだから。」

「また、会えるよね？」

「あたぼうよ！」

「うん、そうだね。」

はあく良い子を演じるのは疲れるぜ！

「話は終わったかな？終わったら行きたいんだけど。」

「あ、はい。」

「最後にティアナ。」

「な、何？」

「またいつか会える日まで男とは付き合うなよ？俺が貰ってやるから。キリッ」

「……………！！なっ、何言ってるのよー！さっさと行っちゃ

いなさいよー！ー！！」

「それじゃあ行きましょうか。マイハニーフェイト執務官。」

「は？……マイハニーではないけど……まあ良いです。行きましょうか。」

そして俺達はミッド中央の陸戦、空戦戦技訓練場へと向かった。

「ほえ、中々広いつすね。」

「まあ、何せ中央だからね。」

と、後ろから声をかけられ振り返るとそこには、

「高町なのは一等空尉及び戦技教導官殿。」

「あはは！そんなにかしこまらなくても良いよ。ティグレ君……久しぶり、一年振りかな？」

「まあそういう計算になりますかね。その節はどうもお世話になりました。」

「いやいや、お世話になったのは私達の方だよ。あの火災の時にデイグレがスバルを助けてあげなかったらスバルは訓練校に入れなかったんだから。」

「いや、あれはたまたま俺が近くでさまよっていて偶然見つけた

だけですから
。」

「でも私が来るまでバリアを張っててくれたでしょ？」

「まああのときの記憶は曖昧なんですけどね。」

「だけど私からはお礼を言わせて……ティグレ君ありがとう。」

「いや、教導官に褒められると照れますなあ！」

「でも、これから先はちょっと厳しいかもよ？」

「つてことはまさか高町教導官が俺を？」

「まあ私だけじゃないんだよ。他にも、シグナム三尉やヴィータちゃん、それにザフィーラにリンちゃんにもお願いしてあるし、フェイトちゃんにもはやてちゃんにもお願いしてあるから、」

「うわーそれはまた厳しい訓練になりそうですね？」

「後、ティグレ君の能力とデバイスも、もう調査済みだからね。」

「なんと、そこまで知られているんですか？普通の調査なら絶対にバレないとは思っていたんですが。」

「確かに普通に検索かけても出なかったよ。」

当然だ。何せ俺が嚴重にその情報を管理しているからな。

「なら、どこで知ったんですか？」

「それは……ティグレ君のお兄さん、ヴァイス陸曹から聞いたんだよ。」

な、なにー！ー！！

あのバカ兄貴め今度会ったら愚痴りまくってやる！！

「あの……ティグレ君？目が怖いよ？」

「……は！……すみませんちょっと考え事をしていたもんですから。」

「そう？なら良いんだけど。」

「まあこれから戦技訓練よろしくお願いしまっす！」

「こちらこそ、私達の訓練についてきてね！」

「頑張りまっす！」

こうして俺は明日からの訓練のための準備をするのであった。

第4話「訓練と決意」

新暦0071年4月

ミッドチルダ中央地区陸・空戦戦技訓練場

「ふぁーあ、おはようございまふ…ふぁーあ」

「はい。おはよう。朝早かったけど大丈夫………じゃないよね。」

「当たり前っすよ！今何時だと思ってんスカ！朝の5時っすよ！？早すぎますよ！」

「まあ…ティグレの為に私達も起きてるわけだから、ね！そんなに怒らないで。」

「

「んー、まあフェイトさんは美しいので許します。」

「そう？ありがとう。」

「軽く流された！？このティグレ一生の不覚。」

「そ、そんなに落ち込まないで…さ、さあ気を取り直して訓練しようか。」

「はい！お願いしまっす！ビシ！！」

「まあ私から教えてあげられるのはスピードと雷資質だけだから、まずは回避の

練習でもしようか。」

「はい！フェイトさん！回避といっても色々ありますがどんな回避をするんですか？」

「んー……全部かなあ？……あ！全部って言っても全ての回避を掛け合わせた回避だからね。」

「んで、どういう風にやれば？」

「例えば……」

と言って、ターゲットが撃ってくる魔法弾を回避していく。

「こんな風に、まずは動き回って狙わせない。」

と言って適当に走り出すフェイトさん

「攻撃が当たる位置にいても……長居しないように回避し続ける。……ね！」

「はいっす！」

「これをティグレは普通のスピードでやってみよう。ソニックムーブはもう使えるよね？」

「全然余裕っすよ。」

「じゃあソニックムーブは最速になるまで使っちゃダメね。」

「りょかいっす!」

「じゃあ早速やってみて。」

はあ相変わらず訓練は無茶な訓練しか教えられないぜ。
まあそれで戦える程度になるなら大歓迎だけどな。

「それじゃあ…いきますっ!」

スバル side

ティグレがいなくなってからランスターさんは凄く私に厳しくなつた気がします。

。 だけどあたしは負けない。

あたしが目指しているのは……

「ああ! もうあんたは何でこうチームワークが出来ないのかしらね!」

「あうゝまた怒られた。」

「誰のせいで清掃やらされてると思ってんのよ!」

「あ、あのホントごめん……」

「謝らないで、鬱陶しい。」

「清掃が終わったらまた訓練の続きだから。あたしもっとちゃんとやるから……」

ランスターさんに迷惑かけないように！」

「あのさあ……気持ちひとつでちゃんとやれるんならなんではじめからやんない

わけ！？どこのお嬢が遊び半分で冷やかに来てんのか知らないけどさ、こっちは

遊びじゃないのよ真剣なの！」

むぐ！

「あ、あたしだって別にお嬢でも遊びでも……！真剣だし……本気で……っ！」

「……掃除が済んだら反省の旨を教官に伝えて訓練復帰次はもうさっきみたいなの失態許さないから」

「あ……うん……あたし掃除用具取ってくるっ！すぐ戻ってくるから！」

憧れで見上げて、希望で進んだ管理局魔導師への道

あたしはやっぱダメで弱くて情けないけど

決めたから……あの日出会った空の星みたいなあの人に、ほんの少しでも近づけるように……

「がんばる！ぞーっ！」

スバルside了

第5話「訓練 2」

「はい。じゃあ今日の朝練終了。朝食を取ったらまた再開ね。」

そう言ってニツコリと笑うのはさん。

そんな満面な笑みをされたら断るもんも断れませんか

「はあ…はあ…り…りよ…かいっす。」

「少し厳しい訓練だけど大丈夫？」

「まあ、何とかついていってはいますけど、正直辛いつすね。」

「まあ私は射撃型だからティグレ君のデバイスを使わせるのも一種類だけになっ
ちやうんだけどね。」

「でも、使い方が前よりも増えて嬉しいっすよ。戦闘パターンも増えたし。」

「そう言ってくれると訓練してるって感じがして嬉しいなあ。」

「まあ一番のネックが俺の魔力量ですかね。やっぱりCじゃあちよ
っと辛いつす。」

「

「でも実際ティグレ君は魔力量はB位あると思うよ。」

やっぱりか、俺も薄々気づいてはいたがまさかやはり魔力量はBあ

ったか。

まあ俺が目指してんのは自力でSSSランク位いかないといけないからな。

それじゃないと俺の夢が叶わないからな。

「え？マジっすか？チョク嬉しいんすけど。」

「まあまだ後1ヶ月はBランク試験は無いからねえ。」

「そうっすけど、俺はまだまだ上にいきたいっすから！」

「そしたら私達の訓練を肩で息してたらまだまだ遠いね！」

「うぐ！……やっぱりそうっすか？」

そんな話をしているともう食堂に着いていて俺達は食事を取り始めていた。

「ね…ねえティグレ君？」

「はい？なんスかなのはさん？」

「それ…全部食べるの？」

俺の皿を指差しながら言うのはさん。

まあ確かにみんなからしたら多いのかも知れないけど、俺からしたら普通に食べる量だからなく。

「それ、推定でも10Kgはあると思うんだけど、」

「え？でもこれでも腹5分目位に止めてるんすよ？」

「す、凄いね。ティグレ君って」

そんなことを言いながら女性との食事を楽しく過ごした後はまたあのキツイ訓練が待ってるのかと思うとめっちゃ鬱だぜ。
だが、頑張らないとな。

「じゃあさっきの続きをしようか。でもさっきよりちょっと早いのでいくから全部撃ち落としてね！」

「よろしくお願いしまっす！」

「……………」

「うっはーっ！疲れたー！！」

訓練が終わり飯を食って風呂に入って自分の部屋に戻ってきた俺だったが、

「……………眠れん！」

なぜだ、まあ良いか俺のデバイスでもメンテしとくか。
ちよつと俺のデバイスの数を教えとくか。

今俺が所有しているデバイスは大きく分けて5つある。

一つ目は二丁拳銃型デバイス

二つ目は刀型デバイスこれも二刀流だ。

三つ目はライフル型デバイス

四つ目は杖型デバイス

最後にグローブ型デバイスだ

二丁拳銃とライフルと杖はミッド式

刀型は近代ベルカ式

グローブ型は真正^{エンシエント}古代ベルカ式

凄く分からんとは思うが、

これを全て使いこなさなきゃいけないのがネックだが、

使っていると段々楽しくなってきたてあまり苦じゃなかったりする。

ついでに資質について話しておこう。

俺の資質は、今使えるのは、自分の近くの風を操ることのできる真
空資質

後は俺の魔力で今は俺の中にいる、最強の死神へディオス・デ・ラ・

ムエルテ

と言う召喚獣を扱っている。

正直ほぼ使うことはないと思うが。

つゝか凄く魔力喰うからあまり使いたくないし。

まあ見せるときが来たら見せてやるよ。

最後にもう一個あるんだがこれは……またの機会に話してやろう。
そんなすぐしゃべると後が面白くないからな！

よし。

デバイスの整備も終わったし。

明日も早いから今日はこの辺で寝とくか。

それじゃあまた明日

「おやすみ」

第6話 「訓練 3」

「ほらほら、そんなやつたらずぐ近くに寄られてまうで！」

「そ…そんなことを言っただって無理っすよ」

「無理やあらへん。それともなにか？ ティグレはこんな美しい女性の言うことを聞けへんの？」

うぐ…そんなことを言われたら断る理由が無いじゃんか！

「いえ！ やって見せますとも俺の愛しのガールフレンドの為に！」

「そうそう。その調子や！」

「そんな気持ちでやらんと出来るもんもでけへんで？」

「そうですね。肝に銘じときます。」

「そうそう、じゃあ今度は水資質でも覚えてみよか？」

「はい！ お願いします。マイガール！」

その後五時間位みっちり練習させられて少しだけ水資質を扱うことが出来てきた。

「よし、大体はええのちゃうか？」

「うっす！ 師匠！」

「うむ！ヨキニハカラエー！」

「え！？言葉がカタカナになってますよ！！」

「そ…そんなこと…あるわけ無いや無いの！」

「ですよね」

「そうや！当たり前やんか！……………はあ…しんど」

「ねえ、今しんどって言ったよね！」

「そんなわけあらへんよ！」

「え！？じゃあさっきのは聞き間違いだったのかな？」

「そう！それや！それが言いたかったんや！」

「まあ良いです。美しい女性の為ですから。」

「美しい女性なら良いんかい！」

「そんな…何でそんな当たり前のことを聞くんですか？」

「ああもうエエわ何も聞かへん。」

「じゃあ今日の所はこの辺で。失礼します。」

「おい、ちょっと待ちいな！」

「え？もしかしてデートのお誘いですか？」

「そんな訳無いわ！」

「じゃあ帰ります。」

「だからちよいと待ちいな！」

「何ですか？好きなら好きって言ってくれば良いのに」

「実はそうなんや。」

「え？何がですか？」

「実は私ティグレ君の事が好きなんや！」

「……………え？今なんと？」

「いや、何度も言わせんといて！（照」

顔を赤くしちゃって……可愛い奴め！

「いや、今俺の聞き間違いじゃなかったら好きって言いませんでしたか？」

「聞こえてるなら言わせないですよ。」

「いやゝはやてさんが可愛くてつい……」

「むーーーーー！」

「すみません！本当すみません。」

「じゃあ答えを聞こか？」

俺としてはあいつというものがあるからあまり答えたくはないんだが……そうか！

「すみませんはやてさん、自分には大切な人がいます。」

「そうか……」

「ですが！」

「え？」

「この世には一夫多妻制度というのがありましてね！」

「はあ。」

「俺は俺が素敵だと思った女性を全て俺のものにしたいと思っています。」

「ハーレムエンドというやつやな？」

「そうです！ということで、俺は俺のものにした奴を愛し続けます。それでも良いですか？」

「全ての女性を愛してくれると誓ってくれるか？」

「はい！命に変えても守ります。」

「そうか……ならまだ私を攻略するのは早いな！」

「それってどういう意味ですか？」

「そのままや。これは全部演技やで？」

「な、なんだってー！！！」

「せやからこれからもハーレムエンドを目指して頑張ってな？」

「……………はい日々精進します。……………はぁー」

第7話 「訓練 4」

「はい！じゃあ今日は私リインフォース？が訓練の相手をするですよ。」

「うおー！ちっちゃくて可愛い！」

「むー！ティグレ君！」

「はい！何でしょうか？」

俺は少しにやけているだろうか。

「ちゃんと訓練を受ける気があるんですか？」

「起こってる顔も可愛い！」

「もう！これで頭を冷やさない！」

「凍てつく足枷ッ！へフリーレンフェッセルン」

「ギャー！あつ、脚がー！」

……10分後

「頭は冷えましたか？」

「いえ、むしろ脚の感覚がもう無いです。」

「はあ、仕方ありませんね。今溶きますから。」

そう言った瞬間俺の足元にあった氷の塊が一瞬で消えた。

「ふえー、すごいっすねー！流石リインさんですね。」

「ふふん！そうでしょそうでしょ！私だって出来るんですよ。」

「しかも可愛いと来た！テンションが上がらないわけが無いじゃないですか！」

「そんな事を言っていないで早く始めますよ。」

「サー・イエツサー！！！」

「はい、じゃあ今日の訓練は氷資質の訓練をしましょう。」

「具体的にどんなことをするんですか？」

「昨日ははやてちゃんから氷資質を教わりましたね？」

「え？ええ、まあ。」

ヤバイ昨日の事を思い出すと体が熱くなってきた。

「ティグレ君？何だかお顔が赤いですが大丈夫ですか？」

「はい！？だ、大丈夫です。」

「それでは氷資質を頭の中でイメージしてそこから更に冷えるように念じてみてください！」

「はい！」

って言われてもなあ

そう簡単にいくもんじゃな……

ってなんか出来てきてるし！

「おお！流石はティグレ君ですね！データベース通りです！」

「データベース通りとは？」

「ティグレ君は物を学習して覚える能力が普通の人より計り知れないくらい高いんです。」

ちよつと待て、

………てことはあれか？

俺は身体だけじゃなく脳までおかしい人間離れしてるってか？

冗談はよしてくれよ！

また俺は皆から軽蔑されてまた一人になるのか？

俺の体を訓練してくれている皆に知られたら1人ぼっちになっちゃうのか？

………いやだよ！

誰か助けてよ！

誰か！誰でも良いから！

「……レ君？」

「……グレ君？」

「ティグレ君！」

「は！？ど、どうしましたか？」

「いや、どうしたもこうしたありませんよ！いきなり顔が真っ青になったかと思えば号泣していたりと……一体どうしたんですか？」

「いえ、考え事をしていただけですので。

見苦しいところをお見せしてすみませんでした。」

「いえ、それは良いんですが。次はそんな事の無いようにお願いします。」

「はい。以後気を付けます。」

「よろしい。では、続きをしましょうか。」

それから夜まで練習が続きその夜、俺ははやてさんの部屋に向かった。

コンコン

「はやてさん、ティグレです少しよろしいですか？」

………返事がないただの○のようだ。

「……んー？誰や？」

「ティグレです。少しよろしいですか？」

「テ、ティグレ君!?!ち、ちょっと待ってな!?!・・・今準備するから。」

ドタバタ!!ドタバタ!!

「あ、はい、良いですよ。」

30分後

「ふう。お待たせや。」

やはり女性は男を待たせるのが好きな人種らしいな。

「いえいえ御構い無く。」

「さ、上がってや。」

「それではお邪魔します。」

はやてさんの部屋に入って一息つくとはやてさんから話を振ってくれた。

「それで?話ってなんや?」

「実は……皆さんが俺の事を完璧に知っているのかなと思ひまして。」

「……?それはどういう事や?」

「いやゝはやてさん達がどこまで俺を知っているのかなと気になりまして。」

「何やそういうことか。」

「それはなあ……………」

第7話 「訓練 4」 (後書き)

いやゝ最近自分でも主人公が何がしたいのか正直わかりません。

自分では普通に書いてるつもりでも、気がつくど、どんどん強化されて正直手に追えません。

これからはますます強くなっていく予定なので今後ともよろしくお願いします。

第8話「訓練 5」

はやてさんからあの話を聞いたのは正直意外だった。
俺の外見的能力しか調べられてなかったのだ。

ひとまず安心したが俺の事をどう伝えたら良いのか、その話を聞いてからずっと考えていた。

「よし、ではこれから私の訓練を始めるが良いか？」

「はい。お願いします。」

「まあ私が教えられるものもないからな、ただ言えるのは＞私と剣を交えて剣技を盗めく…位だからな。」

「いえ、それがシグナムさんから教わるには最善だと思いますよ。」

「そう言ってくれると嬉しいよ。」

「では、ぼちぼち始めましょうか。」

「そうだな。……………ヒュン!!」

一瞬にして俺の間合いに入っていた。そして一太刀

「……………うぐ!？」

「イルシオンよ、まだ遅いぞ。」

「シグナム姐さんが早いんすよ。」

「私はこれでも手加減はしてるんだが。」

「これで手加減っすか？速すぎますよ！」

「何を言う。お前だって本気の1／10も出してないじゃないか。」

「いえいえそんな事はありませんよ。」

「そう謙遜をするな。お前の力も一応分かってるつもりだからな。」

「も、って何ですか？姐さん？」

「いや、実はな主にも言っていない事があってな。」

「それは俺の事で間違いないっすよね？」

「ああその通りだ。」

「それで俺の予想的には俺の出自と体の事ですかね？」

「流石だな。もうそこまで辿り着いているのか？なら話は早いな。」

「んで、それをはやてさんに教えようか迷ってると。」

「主だけではない、私以外の皆にだ。」

「……………ってことは姐さん以外は皆知らないって事ですか？」

「その通りだ。」

「……ふう…良かった。まだ誰も知らないんですね。」

「そうだ。因みにヴァイスもこの事を知らない。」

マジか！あのバカ兄貴も知らないのか。

マジでドンマイだな。

「まあ皆さんが知らないのも無理はないですけどね。」

「そうだな。私も任務であそこに行くまでは知らなかったんだからな。」

「まさか、俺の故郷に行ってきたんすか？」

「まあ任務だったからな。」

「あそこにランチャー的なものはありませんでしたか？何か物凄く馬鹿デカイの。」

「……………いや、見てないがそれがどうかしたのか？」

「いや、それが俺の6個目のデバイスかもしれないんです。」

「……………ちょっと待ってくれ。」

「はい？何でしょうか？」

「イルシオン、お前デバイスを何個持ってるんだ？」

「え？ああ！今は5個ですけど。」

「それをお前は使いこなしているのか？」

「使いこなすっていうレベルでは無いですけどある程度は使えますよ。」

「お前それだけでもすごいぞ！」

「そうですかね。自分的にはまだまだっすよ。」

「しかもお前は魔導師がデバイスは1個迄という規定を違反してるんだぞ！」

「……………ガク……………そうだったのか。じゃあ俺は捕まるんすか？」

「ああ。本来ならな。」

「本来なら？それってどういう事ですか？」

「まあいわゆる固有技能>レアスキル<って扱いになるんじゃないか？」

「それって多重武装的な感じになるんすかね？」

「まあ取り分けそんな感じになるだろうな。」

「そうになったら俺はどうなるんですかね？」

「まあ普通一回は地上の裁判にかけられるんだが、そんな事は私達

がそうはさせない。」

「ありがとうございます！」

「ただし、主や皆にも話さなきゃいけないけどな。」

「あゝ、やっぱりそうなっちゃいます？」

「当たり前だ。で、いつ話すんだ？」

「そこが問題なんすよねゝ何かいい案ないっすかね？」

「そんなの私はしらん。自分で考えるんだな。」

「そ、そんなゝ！」

そんなこんなでシグナム姐さんとの訓練が終わり
俺は皆にどう伝えようか考えるのであった。

第8話「訓練 5」（後書き）

もう主人公はどんどんチート化しようと思います。
感想をコメントしてくれると嬉しいです。

第9話「訓練 6」

「おらおらー！どうしたどうしたー！ガードが甘えぞー！」

「そ、そんな事は言ったって……ヴィータがそんなにぶっ叩くから
だろ！……っ！」

「そんなの軽くやったって訓練にならねえだろ！」

「こんな事になると思ったからヴィータとはやりたくなかったんだ
！……っぐ！」

バリーンという音と同時に物理的プロテクションが壊れたが俺は即
座に新しいプロテクションをはりガードをする。

こんな訓練を俺達はぶっ続けで5時間はやってる気がするんだが。

「よしこれが午前中の訓練のラストな。」

「お？おうどんとこい！！」

ってことはあいつとアイゼンの業が来るわけか。

「アイゼン！！！」

>了解したく

さあ来るか。

それじゃあプロテクションを五重に貼っとくか！

「いくぞー！」

「来い！！！！！」

「でえええやああ！！！！！！！」

ちょっと待って聞いてないよこんなの！

あんな馬鹿デカイの知らないよ！

あんなのクラったら人溜まりもねえじゃん！
くそ、仕方ねえな！

「……………つく！ソニックムーブ！」

＞ソニックムーブ！＜

俺はギリギリで回避することに成功はしたんだが。

「おい！ティグレ！何で避けんだよ！！！」

「あんなの避けねえと俺の身体が持たねえよ！」

「んだよ！つたく！根性がねえなあ！」

「いや、根性とか関係ないから！つゝか普通あんなの仲間に対して
打つか？常識を考えろ！馬鹿！」

「デメエあたしに馬鹿とは何だ！馬鹿とは！」

「今そこ突っ込む所じゃねえだろ！」

「ま、まあ確かに」

「転換はや！」

「仕方ねえだろお前の意見は最もなんだから。」

「まあいくら訓練だからってあれは無いわな。」

「……………すまん。お前と訓練をするのが愉しくてつい……………な」

「ついであんなことされたらたまったもんじゃないぜ？」

「ごめん……………」

「まあそんな事で落ち込んででも始まらねえし、よし！じゃあもう
いっちょ訓練するか！」

「！！……………おう！」

「飯食ってから。」

ズコー——！！！！

「ん？どうかしたか？」

「い、いや、何でもない。じゃあ行くぞ。」

「ん？ああ分かったよ。」

たく、ティグレの野郎後で覚えとけよ！

午後1時

俺達はちよつと遅めの昼食を食っていた。

「なあ？」

「ん？何だ？」

「その量を全部お前が食うのか？」

「ん？ああそうだけど普通じゃね？」

「いや、お前頭おかしいんじゃないのか？」

「いや、頭はおかしくないだろ。むしろおかしいのは身体の方だろ？」

「そ、そんなのはどうでも良いんだよ！」

「まあお前が良いなら良いけどな。」

「早く食え！食ったらすぐ訓練だからな！」

「おう！分かってるよ！」

そんなこんなで楽しく昼食をしてから俺達はまた訓練場の方に向かった。

「よし！やるか！」

「またあんな失敗するなよ！」

「わくってるよ！バーカ！」

「はいはい。俺はバカだねえ。」

「何だか無性に腹がたつんだが？」

どどんヴィータの顔が鬼の形相に代わっていく。

「まあそう言うなって！ほら、さっさと始めるぞ！」

「お、おう。」

そんな事を言いながら俺達は訓練をやり始めた。

.....

気が付くともう夜だった。

あれから何時間やっていたんだろうと思い、時計をみる。すると

「.....10時.....我ながら十分にプロテクションの訓

練をやったな。」

「た…確かにあたしも今回ばかりはやり過ぎた。」

「まあ良いか…：さあ！帰って風呂入って寝よう！」

「じゃあ一緒に帰るぞ！」

「お？おう。…：何だ？それはアプローチのつもりか？」

「てめえ！もう一発アイゼンプチ込むぞ！」

「ごめんなさい。許してください。マジスンマセン。」

そんなこんなで、明日に備えて蓄えるのであった！

第9話「訓練 6」（後書き）

今回はちょっと送れて投稿しました。

これからも、不定期ですがよろしく願います。

第10話「訓練 7」（前書き）

すいません。

投稿が遅くなってしまいました。

第10話「訓練 7」

「よし、これから俺の訓練を始める。準備は良いか？」

「はい！準備万端っす！師匠！」

「ティグレよ、師匠と呼ぶのをやめろと言ったはずだが？」

「そんな、良いじゃないっすか、減るもんじゃなし！」

「いや、むず痒いからやめろ。」

「え、良いじゃないっすか、カッコイイっすよ？みんなの注目の！的な感じなんすよ？」

「いや、俺はそんな柄じゃないし似合うわけがない。」

「何で自分からいこうとは思わないんすか？世の中目立ってなんぼですよ！？」

「俺はこの世の人間じゃないからな。そんな気持ち微塵もない。」

「それじゃあ人生つまないっすよ？」

「そんな無駄口叩いてる暇があったら強くなれ！そして俺を越えてみせろ！」

「……っへ！上等ですよ！やってやりますよ！師匠でも何でも倒して俺は強くなるんすから！」

「うむ。その意気だがお前は強くなって何をするんだ？ いや、違うな、何をしたいんだ？」

「……………それは……………」

……………」

「俺は……………昔…………死にかけた事があるんです。」

ザファイラ side

「ある小さな村で、6才迄その村に住んでいて6才の誕生日の日に俺の村は地獄の業火が俺らの村を襲いました。」

いきなりティグレが話始めた。

「最初は何が起きたのか分からず外を見ました。
するとそこには、家が焼け大人子供が必死に逃げていました。」

64

「それを目の当たりにした瞬間に悟りました。
逃げなきゃいけない、と

ですが動こうにも足がいうことをきかなくなって
家族はすぐに逃げて助かったとは思いますが、
自分は瓦礫の下敷きになってしまいました。」

凄く唐突だったから何かと思えば、凄く深い話じゃないか。これは
しっかり聞いてやらねばな。

「俺は何度も何度も叫びました。」

>助けて！助けて！<と、
そんな事は誰も聞く耳を持ちませんでした。
当然ですよ、みんな自分の事で頭が一杯なんですから。
その頃から俺は人間を憎みはじめた。」

「そして憎みが俺の頂点に達したとき、辺りが真っ暗になり気付けば辺りには何もありませんでした。」

どういう事だ？意識が飛んで一体何が起きたんだ？

「どういう事だと思い俺は三年前に調べました。すると……………ごほ！……………げほ！」

「おい！どうした！ティグレ！」

「……………す……………すみませ……………げほ！……………だ……………大丈夫っす……………げほ！」

「いいからしゃべるな！落ち着け！」

「……………はい。……………落ち着きました。……………ふう」

「一体どうしたのだ？」

「…そうですね…俺が調べた結果から言えば…」

ザフィーラ side 了

「…そうですね…俺が調べた結果から言えば…」

正直俺は絶対に言いたくなかった。

封印していた過去だから

だが絶対にいづれ分かることだから後々に響かない方がらくだからな。

「俺は感情が三段階に別れてるらしいんです。」

「どういう事だ？」

「一番下が今の正常な状態です。そして二番目がさっきの発作が起る物で、最後が体のいうことがきかなくなり勝手に殺人兵器として動きます。」

「……………」

「まあ最後のはもう俺が憎しみの感情を抑え込みますから安心して
いいですよ。」

「いや、少し我らと似ていると思ってな。」

「??それはどういう事でしょうか?」

「いや、我らも昔荒れていた時期があつてな。その度に戦争に駆り
出された。」

「戦争で300年も前じゃないっすか!まるで300年前まで生き
てるみたいな」

「いや、我らは生きてるんだが、まあ生きてると言っても我らはプ
ログラムで本のなかで生きてる感じだからな。」

「……………はい?」

「簡単に言えば今の主に仕える前までは生きてるって事だ。」

「え?それはマジで言ってるんですか?」

「マジもマジ大マジだよ。」

「だからみんな俺の事を面倒見てくれるんすね。」

「それもあるかもしれんが、ただ見てられないってのもあるかもな。」

「そんな、それはないっすよ」

「ま、せいぜい頑張るんだな。」

その後師匠からコツテリ絞られた事は余談である。

第10話「訓練 7」（後書き）

テストや予定が重なって中々投稿できなかった今日この頃如何お過ごしですか？

どうもハルジオンです。

投稿が遅くなってしまって誠にすいません。 m (_) m

これからは毎週金曜日に投稿しようと思いますのでみなさんあまり期待せずに読んでやってください。

第11話 「第一回魔力ランク昇格試験説明会」 (前書き)

まあ見てやってくださいよ。

第11話 「第一回魔力ランク昇格試験説明会」

一ヶ月間あの人達にみっちりしごかれて何か一段とたくましくなった気がする！

今ならこの昇格試験も楽勝のはず！

おっと、そんなことを言ってる間にもう始まるぜ！

「はい！それでは魔法ランクAランク昇格試験を始めますがよろしいですか？」

「……………ん？ちょっと待ってください。俺が受けるのはBランク昇格試験じゃないんですか？」

「え？ですが貴方はティグレ・イルシオン一等陸士ですよね？」

「ええまあそうですけど。」

「ならここであってるんですよ。」

ああ、そういうことですか。
と納得した瞬間におまじかねの人から連絡が、

「やつほゝティグレ君もう試験始まる時間やろ？」

「やっぱりはやてさんの仕業だったんですね？」

「仕業とは人聞きの悪いなあ少しは有り難く思っ
て欲しいんやけどなあ！」

「いきなりそんなことを言われても驚きしか無い
じゃないですか！」

「そんなサプライズに決まってるやん！」

「そんなサプライズいりません！」

「えゝ喜んでくれると思ったんやけどなゝ」

「はあゝもう良いです。もう頑張ります。」

「そうや！その意気や！じゃあ頑張つてな！」

「はあゝ俺の師匠達は本当にロクな人はいねえな！」

「誰がロクな人だって？」

「シ、シグナム姐さん！？今の聞いてたんすか！？？」

「ああバツチリ聞かせてもらった。で、ティグレ。さっきの言葉の意味を教えてくださいか？」

「……………え？な、何の話っすか？」

「ほう？私の前でとぼけた態度を取るのか？良い度胸じゃないか。」

「ひ、ひえゝお助けゝ」

「試験前に何もされなくなかったら何か言う事があるんじゃないのか？」

「はい。自分、ティグレ・イルシオンは最高の教導官の方々に教導を教えていただき嬉しく思っています。」

「よし。上出来だ。試験頑張れよ。私達は試験のサポートだからな

いつでも見てるからな。」

「あまり見てほしくは無いですが精一杯頑張りますよ!」

はあ何か物凄くめんどくさくなりそうだな　俺はBランク昇格試験のマップしか勉強してないからなあ

「それでは説明に入って宜しいでしょうか?」

「あ、はい。お願いします。」

「はい。ではまず今回の試験官を務めさせてもらう本局管理補佐官グリフィス・ロウランです。宜しくお願いします。」

「ウィッス! ビシッ!」

「今回貴方に与えられた試験内容は勉強してきましたか?」

「いえ! 全くしてないです! ちよつとした手違いで。」

「まあ貴方ならすぐ覚えられると思いますよ。」

「それはどういう事でしょうか？」

「色々とはやてさん達から聞いていますから。」

「は、はあ。で、今回はどんな試験内容なんでしょうか？」

「はい。今回は制限時間内にターゲットを壊していただくというものです。」

「で、ここ一体のマップとターゲットを見せていただいてよろしいですか？」

「はい。……こちらがマップとターゲットです。」

「ありがとうございます。」

マップは意外に簡単な造りだなあ。
で、今回のターゲットの……！！！！！！

「……………すみません。」

「はい。なんでしょうか？」

「俺は本当にこいつらと戦わないといけないんですか？」

「そうですね。このターゲットを我々はガジェットドローンと呼んでいます。そして、貴方に戦っていただく数は15機破壊していただきます。」

「そ、そうですか。わかりました。……………」

「？それでは一分後に始めますので。」

チクシヨウ！なんだってあいつらと殺りあわなきゃいけないんだよ！クソ！嫌な過去の記憶を思い出したくもないのに思い出しちまうじやねえか！

「そろそろ始めますがよろしいですか？」

「プツン……………おう。速く始めてくれ。」

「それでは！ 第一回魔力ランク昇格試験………始め！！！」

第11話 「第一回魔力ランク昇格試験説明会」 (後書き)

どうもハルジオンです。

どんどんティグレ君がよく分からなくなってしまっていますね。
ですがこんな事よりもどんどん強化されていきますので、お楽しみに・・・

第12話「試験本番」

ティグレ以外Side

「では、始め！」

「ようやくと始まったな？」

「そうだね。ティグレ頑張ってほしいけど。」

「にやははは、ティグレ君なら大丈夫だよ。」

「あたしもそれには同意だな！あいつはあたしらの訓練に耐えてここにいるんだ！」

「主はやても結構頑張っていたからね。」

「……ちょっと待て。あいつ何かおかしくないか？」

「ほんとやね？あの子飛べへんかったんやなかったっけ？」

「いえ、主はやて、ティグレは飛べないんじゃないんです。飛ばないと誓っていたんです。」

「シグナムさん、それはどういう事でしようか？」

「良いでしょう。折角なのでいま全員にお話ししておきましょう。」

ティグレ以外Side了

俺はいま心の奥底にある小さな部屋にいた。

こんなことは最近は全くなかったのに、あの機械を見た瞬間！俺の心と彼奴の心が入れ替わり俺の試験を滅茶苦茶にするんだろうなとか考えている内にもう一機目を破壊しようとしてるし！

「おらー！これでも喰らえー！！！！！」

相手はなににもできないまま無惨に壊れた。

そして俺の憎しみはどんどん増幅していく。

ダメだもう俺は止められない

誰か俺を止めて欲しい。

そんなことを思い涙を流しながら俺の意識は無くなった。

.....

気がつく俺は医務室に運び込まれていたようだ。
身体はボロボロで動かすこともできない。
その近くには教官達が周りを囲むようにして座っていた。

「知られちゃったッスね。この身体の事を。
惨めッスよね。こんな身体。」

望んでもないのに生まれた時からこんな機械の身体にされて。」

「そんなことねえーよ！立派な身体じゃねえか！」

ヴィータそんなのはフォローになってないぜ。

「……はん！こんな身体がですか？しかも俺はプロジェクトFによって作られた人工人間ですよ？そして作られてから欠陥品だと言われ、機械を詰め込まれ、こんなやつを見て楽しいですか？笑いたき

や笑えばいいじゃないですか!」

そう言った瞬間

……………バシンッ!!

フェイトさんが俺を叩いていた。

「ティグレ! そんなことを言っちゃダメだよ! 私だってプロジェクトFの初代なんだから!

何も恥じることなくって無いんだよ!」

「そんなことわかってますよ! 俺だって恥じたくて恥じてるんじゃないんですから!」

「それじゃあもつと強く生きなきゃダメだよ!」

「こんな俺が生きてる資格なんて無いんすよ。俺なんか生きてても、人を悲しませることしか出来ませんから。」

「そんなことあらへんよ? 何でそんなこと言うん?」

「私達は皆悲しむんよ? それを分からねんからそういうこと言えるんとかいうの?」

「そうかもしれませんね。自分はもう傷付けるものが何もありませんからね。」

こんな男に構っても皆さんを傷付けるだけですから出てってください。」

「嫌だと言ったらティグレよ、お前は……」

「出てけって言うてるだろ！！！！そんなこともわからないんですか！！？」

「……………皆、行こう。」

「なのはちゃん。」

「それじゃあまた来るからな？ティグレ。」

「……………」

そして全員俺の病室から出ていった。

「くそ！何やってんだ俺は！これじゃあ昔と変わらねえじゃねえか

「！」

数時間前

シグナムSide

「良いでしょう。折角なのでいま全員にお話ししておきましょう。」

「ティグレは昔ある村で家族と仲睦まじく住んでいました。

ですがその村で大きな火事があったんです。

そこでは村人全員が殺されました。

………一人を残して………」

「おいシグナム！それがティグレだったのか！？」

「そうだ。しかもあいつは多重に性格を変えることのできる多重人格者だ。」

「じゃああれもティグレ君がやってることなんですか？」

「鋭いがテストロッサ、それはちよつと違う。あいつの今の状態はティグレ自信では制御できない。なんせティグレ自信では無いんだからな。」

困ったような顔で私になのが話した。

「ティグレ君自信ではないってことはティグレ君の中には何人の人格が住んでるんですか？」

「それは私にも分からない私が見たことがあるのはいつものティグレと今のティグレ、そしてもうひとつは……………」

シグナムSided了

第13話 「過去と現実」

シグナムSide

「本当にシグナムがあいつ（ティグレ）の保護者になったのか？」

凄い形相で見えてくるヴィータ。

「こほん、全ては本当の事だ。これは変えようのない事実だ。」

「「「「.....」」」」

皆の沈黙の視線が痛い。

「ずるい。」

「はい？」

「そんなんずるいやんか！ティグレをシグナムだけのものにするな

んて！絶対に許せへん事実や！」

「シグナム！最近帰りが遅いと思ったら！そんなことだったのか！？」

「そうですよ。シグナム、貴女だけのティグレ君じゃないんですから！てゆうか私が最初に見つけた原石ですよ！？」

テストロッサまでまるで人が変わったようだな。

「私は独り占めするためにティグレの保護者になったわけではない。」

「じゃあなんだって言うんですか？」

あのーなのはさん指の周りから魔法弾を撃とうとするのはやめてください。

「これは私がヴァイスに頼まれた事なんだ。」

シグナムSide了

3週間前
シグナムSide

「おい。何で私がこいつ（ティグレ）の保護者にならなきゃいけないんだ。」

「そんなこと言わないでくださいよ。俺と姐さんの仲じゃないっすか！」

「そんなこと関係ないだろ。」

「言っときますけど姐さんが保護者になればあいつの為になると思うんです。」

「けどなあ。私は保護者って義理じゃないだろ？それならなのはやテストロッサ、シャルや我が主の方が適任ではないのか？」

「いや、これはシグナム姐さんしかこなせないですよ！あいつの昔のこともあるんですし。」

「昔の事とはどういう事だ？」

「まあその話はシグナム姐さんが保護者になれば教えてくださいよ。」

「……………解った。私が保護責任者になろう。」

シグナムSide了

「という事になったんです。」

「んで？その昔の事はティグレから教えてもらったんか？」

「ええ、ある程度は……………」

「どういう事や？」

「あいつはまだ私に気をあまり許してなくてまだ隠していることがあると思うんです。」

「まあな〜シグナムは堅苦しすぎるところがあるからなあ〜ん〜どうしたらいいんやろうね〜。」

「何ですか？その悪巧みを考えてる顔は？」

「いやな？それなら私も保護責任者になったらええんとちゃうかな〜って！」

「え〜！はやてだけずるいぞ！だったらあたしはティグレの妹になる！」

「確かにヴィータなら適任だよな。」

「なら私たちも家族になるよ。」

「テストロッサ達まで何を言い出すんだ。」

「なら俺はペットでいいぞ！」

「人間になれる狼なんて普通いるかー！」

「おおゝはやてちゃんナイスツツコミ！」

「伊達に関西弁使ってないっちゅうねん！」

「そんなことはおいといて。
てことはここにいる教官達が家族になると？」

「「「その通り！」」」

「それは解りましたけどティグレにどう説明するんですか？」

「それは今から突撃しに行って伝える！っきゃねえだろ。」

「おい！ヴィータ落ち着け！今はあいつの態度を見たしろ！」

「知らねえな！あたしは行くぜ！」

「主からも何か言ってあげてください。」

「そうやでヴィータ抜け駆けはようないで？行くなら皆でいこか？」

そういう話ではないと思うんですが

「……………解りました。私も騎士です。全員で行きましょう。」

「そうこなくっちゃな！んじゃ行こうぜ！」

はあこれからどうなってしまうんだろうか。
ティグレ、怒らないといいが。

第14話 「新しい家族」

一時間前病室

俺は悔やんでいた。

何に？

俺の言動にだ。

俺は何て事を言ってしまったんだ。

あれじゃあ折角出来た仲間や上司にまた避けられてまたあの生活に逆戻りじゃねえか。

「クソッ!!」

そんなことを思ってるから何か涙が出てきたじゃねえか。

こんな歳になって男泣きとかめっちゃはずいな。

こんな顔誰にも見せれねえよ。

「……つく!……ひつく!……何で……っだよ!……何であんな……
…時に……出てきちまうんだよ!……っひつく!」

そんなこんなで俺が泣き始めてから早一時間が経過していた。

>コンコン…ガチャ<

「入るぞ！」

何と泣き止んだ瞬間に入ってくるとは、しかも許可なしで。

「何で入ってきたんですか？」

「まあ良いじゃねえか！ちょっと話したい事もあるしな。」

「ヴィータだけがか？違うだろ？皆じゃねえのか？」

「皆に決まってるんだろ！ほら、あたしの横に……いねえ！あいつら入ってこなかったな？ちょっと待ってろ！」

「は……はあ。」

結局何しに来たんだあの人たちは？こんな顔誰にも見られなくなかったのに。

そう思い俺は誰もいなくなったことを確認してから目に溜まった涙を拭った。

>ガチャ！ボタンッ！<

「ティグレ君！緊急報告や！」

「は？何ですかいきなり。」

「ここにいる全員がティグレ君の家族になることに決定しました！
パチパチパチパチ！」

「……………え？」

「いやだから、ここにいる教官全員がティグレ君の家族になるんや
て。」

「は？そんなの聞いてないっすよ！」

「そりゃあそうやわ！だってさっき決めた事やからな！」

「なんすかそれ？俺はてっきり皆俺から離れていくんだと思った
んすから！」

「何でや？」

「俺の過去の思い出にあるからですよそんなことが。」

「そうなんか？なら私達は違うで？何故なら皆ティグレ君の事を大事に思っているからな！」

「何で……何で俺なんかを庇うんですか？こんな人を傷付けるような俺なんかを何故……！！！」

「それは……皆ティグレ君の事を心配して守ってやりたいと思っ
て変えてやりたいと思ってるから庇うことも出来るんやで？そ
んな悲しい事言ったらあかんで！」

「悲しいなんて……本当に思ってるんですか？皆が皆思ってるな
んておかしいじゃないですか！」

「何処におかしいところがあるん？皆がティグレ君の事を心配して
悲しんだりしたらいけへんて言うんか？」

「だって普通の人なら人の事よりも自分の事を心配するでしょう。
よ。」

「確かに自分も大切だけどそれよりも大切な事があるから皆必死に生きてるんだよ？」

「じゃあなのはさんの言う自分よりも大切な事って何なんですか？」

「……はあ、ティグレ君はそんなことも忘れてしまったの？ 私は凄く悲しいよ。」

「そんなの決まってるじゃない。自分が最も大切に思ってる人がいるから皆が頑張ってるんだよ？」

「……………」

「そんな事も忘れてしまったって言ってるの？」

「じゃああんたらは俺となんの関係があるってんだよ！」

「関係がなきゃ何もしちゃいけないのかな？」

「フエイトちゃん……」

「それってこれから作っていったら駄目なのかな？」

「駄目ではないですけど……」

「なら決定だね。これから教官メンバー全員が家族だよ。」

「……………はい……………」

第14話 「新しい家族」 (後書き)

すみません。

先週の金曜日は投稿するのを忘れてました。

これからどんどん面白くなっていく予定なので、
応援よろしくお願いします。

第15話 「Staring Stars」

sideスバル

前略……おとーさんとギンガおねえちゃんへ
あたしが陸士訓練校に入校してからもう2ヶ月

「そう！落ち着いてルート守って！」

「うんっ！」

仮コンビでルームメイトのランスターさんは

「ポジションキープ！そのままよ！」

「うん！」

ちょっと怖いけど凄く一生懸命で
朝晩の自主練につきあってくれたり色々教えてくれたりします。

「これで来月分までの予習終了！」

教えた通りでちゃんと全部できたでしょ!？」

「えへへ……ごめんね要領悪くって……」

「結局あんたは自分のバカ力をちゃんと使えてなかったのよね
早めに矯正できてよかったわ。」

「うん、ランスターさんのおかげだよ。
ホントありがとう」

「別にイあんたのためじゃないしね。
コンビの相方が使えないとあたしが迷惑なだけなんだから。」

「でも、ありがとう!」

「いやいやありがとじゃなくって!
あんた冗談みたいに恵まれた魔力と体力持ってさ、デバイスだつて、」

「あ、リボルバーナックル?」

「こんな立派で高価そうなの持ってんだから使えなかったことを恥

「じなさいよ!」

と言って私のリボルバーナックルに軽くランスターさんの武器を当てる。

「……………あ……………」

「何よ?」

「あ、なんでもない。
そうだね! 恥じた!
もっとしっかりやってくよ!」

「げ……………もうこんな時間!」

「うん! 戻ろう!」

スバルsided了

シャワー室

「シャワーが混む時間になっちゃったねえ」

「ぐずぐずしてるからよ。」

「えへへ……ごめん」

「……あんたホントにその写真ずっと持ち歩いてんのね。」

「うん。あたしの憧れの人だから……お守り代わり！
雑誌の切り抜きなんだけどね。」

「戦技教導隊の高町なのは二等空尉」

「うん。すごい人なんだよ！

9歳の頃にもうA A Aランクで次元災害事件を止めたとか
破壊不能って言われた危険な兵器を完全破壊したとか！」

「さすがにそれは噂でしょ。どういう9歳よ」

「……ザアアアア……」

「まあ凄い人だったのは知ってるわよ。」

……わっしや…わっしや……

「有名人だもんね」

「空のエースが憧れの人ってことはあんたも空隊目指してるんだ。」

「ん————ベルカ式で空戦型って今はほとんどいないしね——」

「まあ近代空戦はミッド式の長射程& a m p; 大火力が主流だしね」

「空も飛んでみたいしミット式にも興味はあったんだけど、飛行もミッド式も今のところ適正無いみたいだし、自分で陸上選んだわけだし。」

「ランスターさんは？やっぱり空隊希望？」

「まあね……今は飛べないけど飛べなきゃあたしの夢は叶わないから。」

やっぱりランスターさんは凄いな」

「ね、ランスターさんはさ……」

「あのさナカジマ訓練生、悪いんだけどあたしはあんたの友達じゃないし仮コンビだから世間話位するし 訓練も付き合うけど、必要以上に馴れ合う気とか無いからその辺誤解しないで欲しいんだ。」

あたし、こーゆーやな奴だしね。」

「ランスターさんはいい人だと思うけど、ごめんねちょっと気をつける……」

「悪いわね。」

管理局員

まして魔導師採用や武装隊入りを目指すような人たちはいろんな理由や思いを持ってるもので、あたしもやっぱり夢と憧れと目指してることがある

だから……あたしの隣にいるひとつ年上のこのキレイな子はどんな思いがあるのかなーとかちょっと聞きたかったんだけどな。

「ではここまで。A班はグラウンドだ……遅れるなよ！」

「」「はい！」「」

とうとうか……友達になれたらうれしいな……なんて
言ったらランスターさん怒るだろうなあ……

第15話 「S t a r i n g S t a r s」 (後書き)

どうも、ハルジオンです。

早くオリジナルストーリーを書きたいです。
次も読んでみて下さい。

第16話 「Staring Stars 2」

これが本日までの訓練成果発表だ。

教官判断の総合成績だが各自参考にするように！

「ふえ——こんなんあるんだ——」

「そりゃあるわよ、訓練校の中でも競争はあるんだからね。」

「あたしたちどれくらいかな？」

「どっかの誰かさんのせいでスタートが出遅れたけど、最近はほとんど叱られないしそんなに悪くないと思うんだけど。

…あんたは座学の成績いいしね…
ていうか見えない。」

「あーあたし見えるよここからでも。」

「ホント？」

「視力は自信が……えーとね

32号室ナカジマ&mp;ランスター総合3位！」

「……ほんとだ……」

「やったね……すごいね!」

「うん……!これならトップも狙えるッ!」

あーランスターさんが笑った!

「だね!」

「がんばったかいがあったわ。あんたもよかったわね。」

「うん!」

《……あの子……士官学校も空隊も落ちてるんでしょ?
相方はコネ入局の陸士士官のお嬢だし
格下の陸士部隊ならトップ取れると思ってるんじゃない?
恥ずかしくないのかしらねー》

「ランスターさん、休憩行こう。」

「今の聞こえたでしょ？」

「聞こえなかった。」

「いいから行こう。」

「ちょ、痛い……ッ！」

「言われっぱなしじゃダメじゃない、ちゃんと言い返さなきゃ！」

「んーあたしはそうは思わないかなあ」

「間違ったことを言われた。それは正さなきゃ正しいって証明してみせなきゃダメじゃない！」

「てゆうーか、あんなの軽口とかちよつとした憎まれ口の類でしょ、そんなのに正しいとか間違ってるとかないよ。
ずっこけコンビが予想外に成績良かったからあの子たちもカチンと来たんじゃないかな。」

「誰のおかげでずっとこけコンビよ?」

「そ……それはあたし!あたしひとりのせいだけど。
それにランスターさん、あの子たちが言ってたようなこと思っ
てないでしょ?」

「……さあね!」

「ランスターさん、本当は士官学校とか空隊に行きたくって、こ
こなら楽勝と思って入ってきた?」

「……なんであんなにそんなこと……」

「教えて。あたしとランスターさん、仮とはいえ今はコンビだよ。
パートナーのプライドを守る役目があたしにはある……
……と、思うんだけど……ダメかな。」

「……落第は事実よ。士官学校も空隊も両方落ちた。
だけど、今いる場所を卑下するほど腐ってないわよ。
いつかは空に上がる。だけど今は誇りを持ってここにいる。
一流の陸戦魔導師になる。
ここをトップで卒業して陸戦Aランクまではまっすぐに駆け上がる、
それが今のあたしの目標。」

「じゃあ証明していこう！

正々堂々陸戦で凄いところ見せればみんなきつと認めてくれる。むしろ頼られちゃったりするかも！」

「アホらし、そんなんそうそう上手いくわけ……」

「いく！ランスターさん絶対凄いもん！あたしが保証するッ！」

「ズッコケのあんたに保証されたからってなによ。

だいたいあんた気弱なクセにどきどき妙に強引でワガママよね？」

「あう……」

「しかも考えも軽くて甘い。

あんたみたいなオツムなら人生ずっとお花畑でそりゃ楽しいでしようけど！」

「あの……ごめん……さすがにちよつと傷つくかも……」

「……でもまあ、実力で黙らせればそれでいいってのは確かにそうだわ。気にしないことにするわよ。」

ぱああっ！！！！！

「しかしあんたホントにお嬢だったのね。適当に言っただけだったけど……」

「うちのお父さん確かに陸士隊の部隊長だけど別にコネとかじゃないよ。」

「わかるわよ。あんたみたいな娘ねじ込むなら士官学校が定番だし、わざわざ陸士の訓練校には入れないでしょ。」

「うちは母さんも陸戦魔導師だったし、陸戦も子供の頃からの憧れではあったんだ。
あたしも立派な陸戦魔導師になる！がんばるぞー！」

《だった……？》

「あー！そうだ！ランスターさん！
ストレス解消用にシューティングアーツちょっと教えてあげるよ！」

「えー？いいわよそんなの。」

「基本のパンチとキックだけ、スパンと決まると気持ちいいよ！」

「馴れ合うつもりはないってのに。」

「馴れ合いじゃないよ……経験と学習！
いい？こゝかまえてね……」

「……聞きなさいよ人の話！」

第16話 「S t a r i n g S t a r s 2」 (後書き)

最近インスピレーションが湧かない今日この頃如何お過ごしですか？
どうもハルジオンです。

次から少しだけオリジナルストーリーが入りますのでお楽しみに、

第17話 「お食事会」

はてさて場所が移り今度は、
時空管理局1039航空隊にて始まります。

「それでは以上で教導を終わります。
お疲れさまでした。」

「」「お疲れさまでしたッ!!」「」「」

「お疲れ」。」

「高町教導官……ありがとうございました。」

「シグナム三尉おつかれさまです。」

「良ければ食事を一緒にいかがですか？」

「ああいいですね。」

「ティグレもいますがあいつは先に行ってもらってるんで。」

「それじゃあ待たせちゃまずいですね。行きましょう。」

「本隊の魔導師たちはいかがでしたか？」

「良いですね。よく鍛えられています。
仮想敵もやりがいがありました。」

「ありがとうございます。
では我々はこれで。」

「またよろしくお願いします教官殿。」

「はいっ！
……おつかれさまですシグナムさん」

「ああすまなかったな気を張らせてしまった。
食事は私の同僚とティグレだけだ気楽にしてくれ。」

「はい。」

「アルトは初対面の筈だがヴァイスのほうは……」

「おつかれさまです！ヴァイス・グンセニック陸曹でありますッ」

「アルト・クラリエッタ整備員でありますッ」

「あー地上本部のおもしろいヘリパイロットさんですね！」

「覚えていただいて光栄であります教導官殿」

「姐さん方は遅かったッスね」

「ああ少し他のやつに捕まってな。」

「そう……二人も>レリック事件<については知っているんですね。」

「

「今後も関わっていく方向で動いているからな、そちらの方で何か

進展はあったか？」

「クロノ君が各方面で調査や調整依頼をしてきているそうですけど、今のところは何も。」

「AMF戦関連はテストロッサが動いているがあちらもあまり芳しくはないようだな」

「レリックがこれまで出てきた3つ以外にくつつあるとかAMF兵器がどれくらい存在しているかもまだ何も……」

「発生場所や発見間隔が中途半端で、だから合同捜査本部がなかなか設立されないとか……」

「そうなんだよ！地上部隊同士だとなかなか連携も取れないからね」

「そいつが地上の面倒くせえとこっスね。」

次元航行部隊だとその辺はいくらか身軽らしいですが。」

「海は海で大変だと思うけどね、どちらにしても私達が武装部隊員は誰かが出動わけてくれないと出られないからね……」

「なのは姐さん、あんたは教導隊なんスからそんなに前のめりにならんくてもいいんじゃないッスか？」

「そうだなティグレの言う通りだな、すぐにでも出たそうな顔だったな。」

「落ち着いてますし！別に好き好んで前に出たい訳じゃないですけど、被害とか出したくないじゃないですか。」

「それは勿論だが、」

「それに今ははやてちゃんが追いかけてる夢が本当に叶って、はやてちゃんの予定通り進めば、私は教導官で前線って立場になれるし。」

「主はやては一度決めたことは必ずやり遂げる。必ず叶う」

「その話ティグレは聞いてると思うけど……ヴァイス陸曹とアルトも聞いてるよね？」

「「お誘いいただいています。」」

「はやてちゃんを中心に私とフェイトちゃん、守護騎士のみんな、みんなが集まってたったひとつの事件を追いかける為の部隊。新しい出会いもあるだろうし早く叶うといいんですが。」

「すみません、その話なんすけど、その部隊が出来上がるまで俺一人旅したいんですけど。」

「「……………え?……………」」

「俺、明日から一人旅してくるッスから。」

「何をこんな大事なときに、」

「シグナム姐さん、今だから行くんすよ。俺はまだ弱い。俺はもっと強くならなきゃいけない。その為に俺の身体的にも強くならなきゃいけない。少しの間だけだからさ!」

「それは皆に聞いてみないと分からないだろ?」

「その辺は大丈夫だよ。他の皆には了承を得ているから。」

「それならいいが……くれぐれも怪我をせずに生きて帰ってきてくれよ。」

「大丈夫だよ心配しなくても俺はこんなところで死んだりはしないからさ！」

第17話 「お食事会」 (後書き)

まあ今回も読んでやってみて下さいよ。

第18話 「旅立ち」

「じゃあ俺、行くよ。」

「……………ぐすツ……………ほな体には気を付けなきゃあかんよ?……………」

「大丈夫だよ!はやてさん。俺は貴女方のお陰で一人旅が出来るまでに成長したんだぜ?」

「それでも病気には勝てねえだろ。」

「ヴィータ……………ありがとう。お前は一番可愛い妹のような奴だったよ。」

「……ッな!……………何言ってやがる!……………あたしの方がお姉ちゃんなんだぞ!?」

「……………そうですね……………」

「次はいつ頃に帰ってくるのかな?」

「んゝ、どうでしょうね。俺の一人旅は目的の為に行くものですからね。」
多分なのはさんたちに会うのは早くて1年、遅いといつかは分かりません。」

「うゝん、寂しくなるね。……でも楽しい旅にできてね。」

「はい、ありがとうございます。なのはさん」

「……………」

「姐さんは俺に言葉をくれないんですね。」

「わ、私はまだ認めてないからな。……だが……
……ッくすん……やっぱり駄目だな、何故だか涙が止まらない。」

「姐さん……」

俺はたまらずシグナム姐さんを強く、強く抱き締めていた。

「……ッ！………ティ………ティグレ！？どうしたのだ！？」

「俺は……おれは!!……っひく!!……本当は行きたくないよ。
……でも……俺は、強くなりたいたから、強くないといけないか
ら!!……っく!!」

そう言っていたらシグナム姐さんも俺を強く抱き締めてくれた。

「……ティグレ……決して無理はしないでくれ。……これだけは守
つてくれ……お願いだ。」

「……はい!!……」

……それじゃあ行ってきます。」

「」「行ってらっしゃい!!!!」「」「」

そして、俺は途方もない、行く先もない、一人旅が始まった。
これから起こることも知らずにイキイキと……

シグナム side

「そういえばアイツは何を探しに一人旅をしに行ったんだろうな?」

と、ヴィータが訪ねてきたので、私は……

「あの子は……自分のデバイスとあの子に見合った召喚獣を探しに行っただ。」

「アイツ……結局何個デバイス持ってんだよ!？」

「確か後7個位はあったような。」

「「「えーーーーー!!」」」

「それって持ちすぎやないの?」

「それはそうですが、今のところのティグレの持っているデバイス全てに戦闘データを取るチップが埋め込まれているから良いデータが取れると思いますよ。」

「新しく手に入れたデバイスはどうするんですか?」

なのはがそんな事を聞いてきたから私はこう答えた。

「ティグレは一応複数まだ埋め込んでいないチップがあるからそれを自分で取り付けるだろう。」

「ん？ティグレってそんなことも出来たん？」

「ティグレは旅立つ前から資格を10個以上取ってますからね。」

「え！！ティグレってそんなに取ってたん？」

「全部言ってきましたよか？」

「い、いや、ええよ読まんでも、気が遠くなりそうやわ。」

「そうですか。でもティグレはついでに取ったらいいですけど。」

「どんなやつだよ！？アイツはそんなに頭良かったのか？」

「ティグレ曰く頭の回転が速くて解析能力も高いからそっちのデスクワーク系の資格はお茶の子さいさいらしいぞ。」

「それやったら一人旅中に階級もあげてたりしてな？」

「それが起こりそうで怖いよね。」

「まあどう化けるかはティグレ次第やからな、私より階級が高くなつてたりしてな！」

「「……………」」

「え？何で皆そこで黙るん？」

「いや、アイツならやりかねないなと思ってさ。」

「あ、あはは……………まさか……………ね？」

第18話 「旅立ち」 (後書き)

さあ!! どんどん楽しくなってきた。
書いている自分も楽しくなってきた。
今回も読んでやってみて下さいよ。

第19話 「旅立ち前の思い出」

俺は今宛のない旅をし始めたばかりだ。

俺を見送ってくれた俺の新しい家族には正直悪いとは思ってたが、今は俺の野望を叶えるために旅をしなきゃ行けないと思ったんだ。

1ヶ月前家族の皆に言われたことが旅をしようと思ったきっかけだった。

1ヶ月前八神家自宅

午後8時30分リビング

「じゃあ明日も俺は厳しい厳しい訓練があるんでもう寝ますわ。」

「あ、ちょっと話があるんだが良いか？」

「何ですか姐さん。告白なら喜んで受けますよ？」

「な、何を言ってるんだ！」

照れてる顔もカワイイ

「そうや！ティグレはあたしのもんやで？」

「分かってますよ。はやてさんも俺の事が好きなことくらいお見通しですから!」

「はうッ!今の言葉は反則やで?」

「そうだぞ!!はやてをあんまりいじめんなよ!」

「なんだ次はヴィータか、大丈夫だ俺はロリ属性はないから。」

「ねーのかよ!あたしは、あたしは!……………っ!」

「すまんスマン!謝るから。機嫌直せ!俺はお前も好きだからさ!からかってみただけだよ。」

「…………グスン…………ほ、本当?」

ぐは!なんという、ロリならではの上目遣いの半泣きで俺を萌え殺そうとしてるんじゃないか?

「……ほ、本当だ。信じてても良いぞ!」

「わ、わかった。信じる。……ぐすつ……」

「本当にヴィータの泣き顔は可愛いな！」

「か、かわいくなんかねーよ！」

「いや、そんなことは良いからティグレ、ちよつと話聞け！」

シグナム姐さんに一喝されました。

「はい、スンマセンゴメンナサイモウシマセン」

「いや、そんなに謝らなくても。」

「んで？何の話ですか姐さん。」

「うむ、ここでは話しづらいからちよつと外に出ないか？」

「……？……まあ良いですけど。」

いったい何の話だろうか。俺には皆目検討もつかないんだが
そして俺達は近くの公園のブランコに腰を掛けた。

何故ブランコかって？そんなの決まってるじゃないか！それが恋人
同士のお約束だからだよ！

まあ俺とシグナム姐さんは恋人同士でも何でもないんだけどね！

「ふうっ、んで？話って何ですか？」

「いや、その、今は二人きりなんだから……その……呼び方は堅苦
しくないか？」

「え？……あー……えっと……」

正直シグナムからそんな事を言われるとは思わなかった。
照れてるシグナムもカワユスな！

「い、一体何の事かな？」

「と、とぼけないでくれ。私はその手の物は苦手なのは知っている
だろう？」

「あはは！すまん！あまりにもシグナムが可愛くて少しからかっ
ちまったな！」

「もう！また私で遊ぶのか？」

「だから悪いって言ってるだろ？」

「もう！ティグレってば！まあ良いです。用件はこんなのじゃありませんから。」

「じゃあ何の話だよ。」

「えっと、最近ティグレが、悩んでるようだから相談に乗ってあげようと思てね。」

「悩み事？そんなの人に見せたりはしないからな。」

「悩み事？俺が？いつ？」

「いつ？ってそんなの今もしてるじゃない？」

「何でお前にわかるんだ？」

「そんなの決まってるじゃない、私の○○の○だからじゃない。」

「……はい？今なんと？……」

「何回も言わせないでよ！恥ずかしいんだから！」

「まあ良いや、んで？お前は俺が悩んでると？」

「……うん……」

「………ふう………正直お前だからぶっちゃけるけど、俺はもう少し鍛えたら旅に出ようと思うんだ。」

「え？どうして？」

「色々考えたんだが1つはデバイスを探しに行かないといけないと思っただからだ。」

「今後の為にな！」

「2つは最近家族に甘えてしまっているような気がしてな。」

「そんな、家族に甘えるなんて………あまり甘えてないじゃない。」

?????

「そうだよ！ティグレはまだあんまり甘えてへんやないか！」

「ッザ！……………誰だ！」

「そんなに身構えんといて？」

そして暗闇から出てきたのは……

「なんだ、はやてさんじゃないですか！？」

「そうやで！皆のアイドル、はやてちゃんやで？」

「皆のアイドルとか……………乙乙」

「ちょWWWWシグナム？ホントにシグナム？性格が違いすぎるやんか！」

「まあまあ、んで？はやてさんも俺に話があったんじゃないですか？」

「いやゝまさかティグレから旅に出るなんて聞いてなかったからな。でもいいんじゃないの？自分のやりたいことをやりゃあエエんとちゃう？」

「ありがとうございます。

それと隠れてる皆も異論はないかな？」

「やっぱりバレてたか。流石はあたしのお、お兄ちゃん的存在だな！」

「ぐはっ！い、今は効いたぞ。ヴィータも成長してるってことだな！」

「……………なでなで」

「……………えっへへ」

「よし！俺はやっぱり旅に出るよ！皆のためにもな！」

「うん！頑張ってた？」

というのが俺の思い出の1ページの記憶に残っている。

まあ今となっではいい思い出なんだがな！

はあ何でこんなに根気よく話してるんだか。

第19話 「旅立ち前の思い出」 (後書き)

いや、シグナムさんカワイユスな〜!!

もう死んでも良いかも、、

自分で書いていて涙がでてきました。

これからもヨロシクです。

第20話 「独りの男の子」

俺は今ミットチルダの某場所の保護施設に来ている。

何の為って？それは俺が以前助けた奴が此所に今はいてな。

そいつを見に来たわけだ。

ティグレ「すみません、ティグレです。」

先生「あら、ティグレ君最近は来てないから心配してたんですよ？」

ティグレ「すいません俺にも色々あって、まともに顔出せなくて。」

先生「あの子もティグレ君に逢いたがってましたよ？」

ティグレ「そうだろうなと思ってきたんですよ。」

先生「うふふ、じゃあ案内しますね。」

そして俺は奥の子供部屋へ向かった。

エリオ「……あッ！兄さん！！！！」

物凄い勢いで突進してくる奴をドンと体で受け止めようと俺は構える。

《ダダダダッ！！……ゴスッ！ゴロゴロバタンッ！！》

ティグレ「相変わらずお前のタツクルは激しいな？」

エリオ「ごめんなさい、痛かった？」

ティグレ「いや、大丈夫だよ。……エリオ、久しぶりだな！」

エリオ「うん！ティグレ兄さん。」

そう、この子はエリオ・モンディアル

訳あって俺が助け今はフェイトさんが保護者になっている。

ティグレ「いつぐらいから会ってなかったんだろな。」

エリオ「うーん、分かんないけど1年位？」

ティグレ「おお、そんなに会ってなかったのか！それはすまん。」

エリオ「いやいや、兄さんも忙しかったんでしょ？それなら仕方ないよ。」

うう、何て優しい義弟なんだ！お兄さん泣けてくるぜ。

ティグレ「最近はどうだ？フェイトさんと上手くやってるか？」

エリオ「うん！フェイトさんは優しくて……そうだ！兄さん！」

ティグレ「ん？何だよ？」

エリオ「えっとね、兄さんは《きどろっか》って知ってる？」

ティグレ「きどろっか？」

きどろっか……起動ろっか……機動六課

ティグレ「……ああ！機動六課ね！知ってるよ。それがどうした？」

エリオ「僕そこに行くんだよ？」

ティグレ「は？……聞いてないぞそんなの！」

エリオ「あれ？フェイトさんから聞いてないの？」

ティグレ「全く聞いてませんけど……！」

エリオ「まあ僕だけじゃないけどね。」

ティグレ「ん？まだいるのか？」

エリオ「はい、えっと、まだ逢ったことないんですけど、キャロ・ルシエっていう子なんですけど。」

ティグレ「な、なに―――!!!!!!キャロも行くのか!?!」

エリオ「はいそうですけど、兄さんはキャロさんのことを知ってるんですか？」

ティグレ「ん？まあな」

俺はすぐさま通信を入れた。

フェイト「…………ツピ！……はいテストタロッサですが。」

ティグレ「あ、フェイトさん！？俺です。ティグレです！」

フェイト「あれ？どうしたのティグレ。」

ティグレ「どうしたの？じゃないですよ！エリオとキャロを機動六課に連れてくのは本当ですか？」

フェイト「連れてくなんて、人聞きの悪いこと言わないで、それはエリオとキャロが決めたことなんだから。」

ティグレ「なん……だと……！？」

エリオ「僕達がフェイトさんといたいって言ったんです。」

ティグレ「だって、あそこは事件解決のためにはやてさんが動かす組織なんだぞ？戦うかもしれないんだぜ？」

エリオ「分かってますよ？それも承知で言ったんですから。」

ティグレ「ま、まあお前らが決めたことなら止めないけどな。」

エリオ「兄さん！……兄さんは機動六課には入らないの？」

ティグレ「ん？俺か？まあ呼ばれてはいるんだけどな？」

エリオ「なら一緒に行こうよ！」

ティグレ「だがな、俺は入隊はしないでゲストとして行こうかなと考えてんだよ。」

エリオ「え？どうしてですか？」

ティグレ「だってあれじゃん？入隊したら規制が厳しくなるからな、俺はそういうのは嫌いなんだよ。自分にメリットが無いだろ？」

エリオ「規制って何？」

ティグレ「んー、まあ簡単に言うと俺の魔力にリミッターが掛けられるって感じだな。」

エリオ「因みに兄さんの魔力ランクは？」

ティグレ「俺か？俺は……今はSSランクだから5ランクダウンでお前らと同じBランクになるかな、機動六課に入ったら。」

エリオ「そんなに下がるの？」

隊長グラスの魔力を持ってる人は大変なんだね。」

ティグレ「まあそういうこったな。」

エリオ「兄さんはこれから何処へ行くの？」

ティグレ「とりあえず次はキャロの所に行ってそれから一人旅かな？」

エリオ「ふーん大変なんだね。」

ティグレ「そうでもないさ、自分のためだからな。」

エリオ「じゃあ兄さんも頑張ってね！」

ティグレ「ああ！エリオもな。次会うときは機動六課だ。」

エリオ「うん、またね！」

その言葉に俺はそっと手を振り次の場所へと向かった。

第20話 「独りの男の子」 (後書き)

今回はエリオ路線に走ってみた作者のハルジオンです。

最近オリジナルのストーリーを書いていても自分が納得しても面白く無い様な気がして困ってます。

何か意見が欲しいので色々教えてくださいたいと思います。

第21話 「小さな龍召喚士」

俺はエリオと別れてからすぐ管理世界某所の自然保護区に来ていた。

「えーっと、あの人たちはいずこWWW・・・・・・はああ寂しい」

とかちよつと一人でボケてみたが、ツツコんでくれるひとがいなくてブルーな気持ちになっていると、

??? 「おやゝ？ ティグレじゃないかい？」

出たな鬼ババ！

??? 「鬼ババとは聞き捨てならないねえ！ え？ ティグレ。」

ティグレ 「あWWWスンマセンもう言いませんから頭をグリグリするのはやめてWWW」

キャロ 「あれ？ お兄ちゃん？」

ティグレ 「おお俺の癒しの元WWW」

??? 「ほう？ あたしは癒してはないと？」

ティグレ 「そ、ソシナコトナイヨ WWW」

??? 「じゃあまずそのカタコトの言葉を何とかしようか？」

キャロ 「もうミラさん、あまりお兄ちゃんをいじめないでください。」

ミラ 「ああもうわかったわかった。もう苛めないよ。」

ティグレ 「ありがとう、キャロ……」

そう言いながら俺はキャロの額に自分の唇をつける。

キャロ 「お、お兄ちゃん!？」

キャロが顔を真っ赤にしてやがるぜ！可愛えのゝ

ティグレ「ちょっとした御礼だよ。」

キャロ「あ、ありがとう……ございます。」

ティグレ「そうだ、話は変わるが、」

キャロ「は、はいッ。な、何ですか？」

ティグレ「お前エリオと機動六課に行くんだってな？」

キャロ「それは、フエイトさんから聞いたんですか？」

ティグレ「いや、昨日エリオの保護センターに行ってきたんだ。

その時エリオ自身に聞いたよ。」

キャロ「お兄ちゃんは反対ですか？」

ティグレ「機動六課に行くのがか？

俺的には別にお前らが決めたことだからな、今更反対なんて無いよ。」

キャロ「それは本当ですか？」

どんどんキャロの顔がパアアッと明るくなっていく。
こいつもこいつで恐かったんだろな。
まあそういう時は俺が盛り上げてやらんとな。
そして俺はキャロの頭をそつと撫でてやる。

キャロ「お、お兄ちゃん!？」

ティグレ「ん？ああ気にするな！これも可愛いキャロの為だよ！」

キャロ「あ、ありがとうございます。」

ティグレ「……起動六課……どんな危険が待ってるかは分からんが
色々な人達がいるからな、その人達 と助け合って仲良く
やってくれよ？」

キャロ「お兄ちゃんは行かないんですか？」

ティグレ「俺は色々とやることもあるからな。起動六課が始動した
時には多分間に合わないからな、俺 はゲストとして行こ
うと思ってるんだよ。」

キャラ「そうなんですか……」

ティグレ「おいおい、そんなに落ち込むなよ！絶対に会えない訳じゃないんだからさ！」

キャラ「それは……そうですね……ッグスン！！」

俺は念話でミラさんに話しかける。

ティグレ《スイマセンミラさん助けてください》

ミラ《そんなのあんたが自分で撒いた種だろ？だったらあんたが何とかしなよ。》

ティグレ《ミッラっさっん》

ミラ《しゃくらないな、ちよっとまってる。》

ミラ「良いかいキャラ、ティグレにも色々あるんだよ。きっと、やらなきゃいけないことだってありだろうしその辺は大目に見てやんな。」

キャラ「……はい……わかり……ました……」

ミラ「解ればよろしい。」

ティグレ《ありがとうございます。ミラさん。》

ミラ《まあ気にすんなって!》

ティグレ「まあそういう事だからさ、キャラ……起動六課頑張れよ?
期待してるからな!」

キャラ「はい!頑張ります!」

第21話 「小さな龍召喚士」 (後書き)

キャラ超可愛いwww

もうどうしたらいいかわかりません。

最近はクイーンズゲイトが面白くて小説を怠っているような気がします、

一生懸命頑張っています。

第22話 「起動六課（前）」

二年後、起動六課始動日

起動六課ロビー

「起動六課課長、そしてこの本部大社の総部隊長八神はやてです。平和と法の守護者時空管理局の部隊として事件に立ち向かい、人々を守っていくことがあたしたちの指名であり、成すべきことです。実績と実力に溢れた指揮官陣、若く才能に溢れたフォアード陣、それぞれ優れた専門技術を持ったメカニックやバックヤードスタッフ、全員が一丸となって事件に立ち向かっていけると信じています。まあ長い挨拶は嫌われるんで、以上ここまで、起動六課課長及び部隊長八神はやてでした。」

挨拶が終わると全員から大きな拍手がはやてに与えられた。

起動六課…廊下

「シグナム、本当久しぶりです。」

「ああテストタロッサ、直接会うのは半年ぶりか。」

「はい、同じ部隊になるのは初めてですね。どうぞよろしくお願い

します。」

「こちらのセリフだ、大体お前は私の直属の上司だぞ？」

「それがまた何とも落ち着かないんですが、」

「上司と部下だからな、テストロッサに“お前”呼ばわりも良くな
いか、敬語でしゃべった方が良いか？」

「あう、そういう意地悪はやめてください。良いですよテストロッ
サで、お前で。」

「そうさせてもらおう」

「そういえばティグレは今日は来ないんですか？」

「いや、今はシャーリーの所にいるはずだが。」

起動六課…デバイス研究所

「シャーリーさん、俺のデバイスは？」

「ああティグレ君ね！貴方のデバイスならもうできてるわよ？」

「ありがとうございます。」

「ティグレ君のデバイス多いから1つのデバイスにするのに時間掛かっちゃったじゃない。」

「スイマセン、でも組み込んでくれたんでしょ？」

「当然でしょ？あたしを誰だと思ってるの？」

「とりあえずそれでティグレ君のデバイスは全部なんだよね？」

「んー、そうですね。全部です。」

「それにしても凄いね、一人一個の筈のデバイスをティグレ君は15個も持ってるんだもんね？」

「すごいだなんてそんな、こうでもしないと強くなれませんから。」

「でもあんまり無茶しちゃダメだよ？」

「わかってます。ツとじゃあそろそろ俺達も向かいますか？」

「それもそうね。行きましょう。」

起動六課…廊下

「そういえば、お互いの自己紹介はもうすんだ？」

「え、えつと——名前と経験やスキルの確認はしました。」

「後部隊分けとコールサインもです。」

「そう？じゃあ早速訓練に入りたいんだけど良いかな？」

「」「はいッ！！！！！」「」「」

起動六課…ヘリポート

「ああ！ヴァイス君！！
もう準備できたんか？」

「もう準備万端！いつでも出れますぜ？」

「うわーこのヘリ結構最新型なんじゃない？」

「AF704式一昨年から武装隊で採用され始めた新兵器です。

機動力も積載能力も一級品ツスよー！

こんな機体に乗れるってのはパイロットとしては幸せでしてねえ！」

「むう！ヴァイス陸曹！」

「え？」

「ヴァイス陸曹は皆の命を乗せるパイロットなんですから、ちゃんとしてないとダメですよ！？」

「ヘイヘイ、わかってまさあね、リイン曹長」

「八神隊長、フェイトさん、行き先はどちらに？」

「首都クラナガン」

「中央管理区まで」

「りょいかい、行くぜストームレイダー。」

《OK Take OFF Standby》

轟音と共にはやて達を乗せたAF704式は首都クラナガンへ向かった。

第22話 「起動六課（前）」（後書き）

やっと本編に入ることが出来た作者のハルジオンです。

「起動六課が出来てから何が起こるか心配な主人公です。」

まあ今回から主人公や色々なキャラを使って作者とキャラで話していききたいと思います。

「まあこれから何が起こるかはまだ秘密何ですか？」

何を言ってるんだよ！当たり前じゃねえか！（o~ー、）b

「ですよね、お約束だもんね。」

だが！ 「え？」

ちょっとだけ教えよう！

「さっすが作者だね！そこにシビれる懂れるww（笑）」

ってことで次の話は“訓練”だ！！！！お楽しみに！

「えー！それだけかよ！」

第23話 「起動六課（中）」

起動六課訓練スペース

シャー「なのはさーん!!」

元気よくシャーリーさんがなのはさんの所に向かっていった。

な「シャーリー!!」

ティグ「ウィーッス!!」

な「あ、ティグレも練習に来たんだ?」

ティグ「んーまあそうしてくれと言われたもので。」

それからすぐにランニングから帰ってくるメンバー達

な「今返したデバイスにはデータ記録用のチップが入ってるからちよつとだけ大切に扱ってね。……それと、メカニックスのシャーリーから一言」

シャー「えー、メカニックデザイナー兼起動六課通信主任のシャリオ・フィニーノ一等陸士です。みんなはシャーリーって呼ぶから皆も気軽にそう呼んでね!!」

皆のデバイスを改良したり、調整したりするので、時々訓練を見させてもらいます。……デバイスとかの相談とかあったら言っ
てね!!」

「「「はい!!!!!!」」」

な「じゃあ次にティグレから挨拶をお願い。」

ティグ「ほーい。……今紹介に預かったティグレ・イルシオンだ。歳は今年で二十歳階級は空戦魔導師一等空佐だ。因みに今起動六課で一番偉いのが八神部隊長だ。階級的には俺の方が上だが、お前らと同じ所に所属するから、気にせずにタメ口で話してくれて結構だからな!

つつかエリオやキャロはともかくスバルはちよっと胸大きくなっ
たんじゃないか? ティアナも大分成長したし。」

ス「えへへーそうかな?」

ティ「大きなお世話よ!!」

ティグ「スバルくどれくらい大きくなったかお兄さんに触らせてみ

なさい？」

ス「ティ・・・ティグレになら・・・良いよ？」

な「お取り込み中失礼なんだけど訓練に入りたいんだけどいいかな？」

エ「兄さん・・・・・・・・失望したよ。・・・・」

ティグ「いや、違うぞ！男とはそういう生き物だ。」

ティ「はいはい、そんな事言っていないで早く訓練するわよ。」

ティグ「ティアナ冷めたゝい。でも訓練をしないとイケないしな、仕方ないから始めよっか。」

な「なんか引っかかるけど、早速訓練に入ろうか？」

ス、ティ「は、はい——でも此処ですか？」

な「うふ！……シャーリー。」

シャー「はい！……起動六課自慢の訓練スペース、なのはさん完全監修の陸戦用空間シュミレーター………ステージセット。」

ボタンを押したと同時に巨大なビルが出来ていく。

ティグ「うわゝ、スツゲゝ！なんかテンションが上がってきたつすよ！」

シ「ヴィータ此所に居たのか。」

ヴィ「シグナム、」

シ「新人達は早速やってるようだな。」

ヴィ、シ「ああ——————お前は参加しないのか？」

ヴィ「4人ともまだヨチヨチ歩きのひよっこだ。あたしが教導を手伝うのもうちよっと先だな。」

シ「そうか、ならティグレを訓練してやれば良いじゃないか。」

ヴィ「あいつは私の取り分じゃねえ、あれはシグナムやフェイトの取り分なんだよ。」

シ「そ、そうなのか。まあそれなら良いんだが。」

ヴィ「まあ自分の練習もしたいしき。同じ分隊だからな、あたしは空でなのは守ってやんなきゃいけない。」

シ、ヴィ「頼むぞ——ああ」

ヴィ「そういえばシャルは？」

シ「自分の城だ。」

起動六課医務室

シャ「ふふーん！いい設備。これなら検査も処置もかなり出来るわね？」

ル「本局医療施設の払い下げですが実用にはまだまだ十分ですよ！」

ア「皆の治療や検査お願いしますね？ シャマル先生！」

シャ「はい！！！」

場所は戻り起動六課訓練スペース

な《良しと。みんな聞こえる？》

「「「はい！！！」」」

シャ「じゃあ早速ターゲットを出していこうか。今日ティグレは見学ね？」

ティグ「ほい」

な「まずは軽く8体から」

シャー「動作LVC攻撃制度Dってどこですかね？」

な「私たちの仕事は搜索指定ロストログアの保守管理、その目的のために私たちが戦うことになるのは……コレ」

シャー「自立行動型の魔導機械、これは近づくとか攻撃してくるタイプね。攻撃は結構鋭いよ？（笑）」

な「では、第一回模擬戦訓練ミッション目的、逃走するターゲット8体の破壊又は捕獲15分以内。」

な、シャー「それでは、————ミッションスタート！！」

時空管理局 ミッドチルダ地上本部 中央議事センター

は「搜索指定質物ロストログアについては皆さんよくご存じのことと思います。」

様々な世界で生じたオーバーテクノロジーの内消滅した世界や古代文明を歴史に持つ世界において発 見される危険度の高い古代遺産、特に大規模な災害や事件を巻き起こす可能性のあるロスト

ロギア　　は、

正しい管理を行わなければいけません、盗掘や密輸の流通ルートがあるのも確かです。

……さて、我々起動六課が設立されたのには一つの理由があります。

第一種搜索指定ロストロギア通称「レリック」

フェ「このレリック外観は只の宝石ですが古代文明時代に何らかの目的で発明された超高エネルギー結晶　　体であることが判明しています。」

レリックは過去に四度発見されその内三度は周辺を巻き込む大規模な災害を起こしています。」

管理局の議長団達も驚きの声を隠せないでいた。

フェ「そして、後者二件ではこのような拠点が発見されています。」

そこに映っていたのは、まるで生体ポットのような形をした物が映っている場所だった。

フェ「極めて高度な魔力エネルギー研究施設です。発見されたのはいずれも未開の世界、こういった施設　　の建造が許可されていない地区で災害発生直後にまるで即席を消すように破棄されています。悪意　　ある、少なくとも法や人々の平穏を守る気のない何者かがレリックを収集し、運用しようとしている　　る…広域次元

犯罪の可能性が高いのです。

そして、その何者かが使用しようとしていると思われる魔導機械がこちら、通称ガジェットドローン……レリックを初め特定のロストログアの反応を特定し、それを回収しようとする自立行動型の自動機械です。」

起動六課訓練スペース

まだここではF Wメンバー達はガジェットドローンに苦戦していた。すごい速さでガジェットドローンを追いかけていくスバル

ス「はあああああ!!!!!! ツク!!!!!!」

魔力弾を放つスバルだが
ヒューン!!!! ツブオン!!!!

ス「なにこれ動きはやつ!!!!!!」

ことごとく攻撃が外れてしまった。

尚も走り続けるガジェットドローンの前に一人の男の子が立ち
はだかる。

そこへ一機のガジェットドローンが男の子に向かって魔力弾を放つ、それにならって残り三機の機械 も魔力弾を放つ、それをエリオは器用に回避していく。

そしてその勢いでジャンプしビルを踏み台にしてガジェッ

トドローンに攻撃を仕掛ける。

エ「ツていやあああ！……！！！」

だがやはり当たらない。

エ「はあ……はあ……だめだ、ふわふわ避けられて当たらない。」

ティ「前衛二人分散しすぎ！ちよつとは後ろのこと考えて！」

エ、ス《は、はい！……ごめん！！》

ティ「チビッ子、威力強化お願い。」

キャ「はい！ケリユケイオン、」

キャロのブーストで威力が上がったティアナの魔力弾をガジェット
ドローンへ放つ

ティ「シューーッ！……！！！」

放ったのは四発
的確に四機を狙ったが、
バリア的な物に阻まれてしまった。

ティ「ツバリア!？」

キャ「違います。フィールド系!!」

ス「魔力が消された？」

な「《そう、ガジェットドローンにはちょっと厄介な性質があるの。
攻撃魔力を掻き消すアンチ・マギリング・フィールド通称AMF普
通の射撃は通じないし、》

ス「あーッくそ!このーッ!」

ティ「スバル!バカ危ない!」

な「それに、AMFを全開にされると……」

と言ったと同時にスバルのウィングロードの足場が不安定になりス

バルはド派手にビルに突っ込んだ。

な「飛翔や足場作り移動系魔法の動きも困難になる。スバル、大丈夫？」

ス「フーッ！な、何とか」

シャー「まあ、訓練中ではみんなのデバイスにちょっと工夫して擬似的に再現してるだけなんだけどね。でも現物からデータを取ってるしかなり本物に近いよ？」

な「対抗する方法はいくつかあるよ？。どうすればいいか素早く考えて素早く動いて。」

第23話 「起動六課（中）」（後書き）

遂に起動六課での生活が始まりドキドキしながら始まった教導ターゲットは素早く逃げ回るし、AMFという魔力を掻き消すフィールド防御をしてくるガジェットドローン八機、何とか四人の力で倒すことが出来た。

ザ「おい作者、今回は俺が出ていないではないか。どういう事だ？」

話の途中で腰を折るなよ。

どうもハルジオンです。

ザ「お前は俺に殺されたいのか？」

へ、やれるものならやってへぶあー！！

ザ「俺も盾の守護獣で守護騎士だからな、お前よりは強い自信があるぞ。」

く、クソ！なんだお前らこんなか弱い俺に暴力を振るうなんて अच्छাইけないことだぞ？

ザ「知らんな、だったら出せ。」

わ、分かったよ出すよ

ってことで次の次からは本編なんてすっ飛ばし各キャラのフラグ強化をしようと思います。

気に入らない所もあるとは思いますが、そこは生暖かい目で見てやってください。

第24話 「起動六課（後）」

ティ「チビッ子、名前なんてったっけ？」

キャ「キャロであります。」

ティ「キャロ、手持ちの魔法とそのチビ竜でなんとかできそうなのある？」

キャ「試してみたいのがいくつか」

ティ「あたしもある、スバル！」

ス「オツケー、エリオ！あいつら逃がさないように先行して足止めできる？」

エ「あ、えっと」

ス「ティアがなにか考えてるから、時間稼ぎ」

エ「やってみます。」

シャー「へえ、みんなよく走りますね！」

ティグ「全くだ！俺はあんなに今は走れないかもな。」

な「危なっかしくてドキドキだけどね。デバイスのデータ取れそう？」

シャー「良いのが取れてます。四機ともいい子に育てますよ。レイジングハートさんも協力してくださいね？」

>わかりました。<

エ「行くよストラーダ！カートリッジロード」

>cart ridge load<
ガシャン！！

エ「ていああああ！！！！！！」

橋の地面を切り裂くと橋が崩れ落ち、ガジェットドローン達はそれ

の下敷きになった。

だが二機は上へ飛び免れたかと思いきや、

ス「潰れてろ！」

スバルが飛び、ガジェットドローン一機に攻撃を仕掛ける。
だがAMFがあるために壊せない

「やっぱ魔力が消されちゃうといまいち威力がでない。そんなら！
ウリヤアアア！」

後ろを取りそのまま足で固定し後ろを殴った。その結果

ブリッ！ブリッ！ドカーン！

ガジェットドローンは穴が開き爆発した。

ティグ「すいやせんなのはさん、俺もぶっ壊したくてウズウズしてるんですが。」

な「んーそうだね、新しくデバイスも貰ったことだしね。じゃあ試しにやってみる？」

ティグ「はい！お願いしまっス！じゃあシャーリーさんお願いします。」

シャー「オッケー、任せといて！」

と言って画面をタッチしたと同時に出てきたのはでかくて丸い球体型のガジェットドローン
俺はボーリングと呼んでるがな！

な「何？この機械？見た感じガジェットドローンっぽいけど。」

ティグ「ご名答、最近になって発見された新型ツス！強さは折り紙つきツスよ？（笑）」

な「じゃあこの機械を10分以内に破壊。では、ミッションスタート」

ティグ「行くぜバディ」

《ああ、任せてもらおう。》

「いくぜ！オプロクラトリア！モードツインブレイド」

そう言った瞬間に俺の首に付いていたネックレス型のデバイスがどす黒く光り一瞬で真っ黒なツインブレイドが現れた。

ティグ「そうそうこれこれ！やっぱテンション上がってきたぜ！勿論殺傷設定にしてるよな？」

《当たり前だ。我を誰だと思ってる。》

ティグ「そうだったな、悪かったよ。ならちやっちゃと片付けちゃいましょうか！」

と言ったのも束の間ガジェット二型は跡形もなく切り刻まれ大きく爆発した。

ティグ「ヒューッ！やっぱデバイスを持って戦うと気持ちいいな！こう、気持ちがスカッとするな。」

な「凄いね、まだリミッターを掛けてないから自由に動くでしょ。あっという間だったね。」

ティグ「まあ俺もこれ位しないと示しが付きませんから。」

な「何か私たちが教導してたよりも強くなってる？」

ティグ「クラトリア、モードリリース……まあ俺にだって色々一人旅をしてるときにありましたから、修行も怠ってはいませんし、新しい発見もありましたから。」

な「そうだよな、でも何でそんな強いのに起動六課に入ろうと思ったの？最初は結構嫌がってたのに」

ティグ「そうですね、勿論今でも嫌ですけど俺にも別の任務がありますから、それを調べるのにこの起動六課が楽に調べられると思ったからです。」

な「え？その任務って？」

ティグ「はい、細かい話は終了なのはさんは教導に専念してください。教官なんですから。」

そして俺たちは出勤初日からハードな訓練をし、一日が終わった。

第24話 「起動六課（後）」（後書き）

後書き

という事で起動六課初日訓練編でした。

皆さん如何でしたでしょうか？

楽しかった人もそうでない人もいたとは思いますがそこは慈愛の眼差しで見てください。

ってことで今日お呼びしたのは！

リインフォース？さんです！

パチパチパチパチWWWWWW

リイン「何で私を呼んだんですか？」

え？それは……ちっちゃくて可愛いから！！（o~_~_）b

リイン「凍てつく足枷ッ！！」

ギャーッ！

あ、足が冷たくて痛い

リイン「むうッ！！そんなに作者さんがロリコンな変態だとは思いませんでした！！」

いやいや、私は変態ではありません。
フェミニストです。

リン「もういいです。」

ちょっと待って！他にも理由があるんだって！f（^^；

リン「じゃあ何なんですか？その理由って？」

それは……次回のお楽しみにw w w w w（笑
因みに次回からはフラグ強化編です。
あまり期待しないでね。

第25話 「小さな騎士との夜」

訓練が終わった夜、俺はある人の所へ向かった。
さて、あいつは……多分あそこだな。
そう思ったらすぐ向かうぜ！

起動六課隊長室

コンコン

は「はい。」

ティグ「あ、俺ッス！ティグレっす。」

は「まあ入ってええよ。」

ティグ「じゃあ失礼しまっス。」

は「こんな時間にどないしたん？」

ティグ「いや、リインをお借りしたいんですけど。」

は「リインに？まあええけど何に使うん？は！まさか、あんなこと（R18）やこんなこと（R18）をするんやろ！駄目やそんななら貸せないで？」

ティグ「いいえ違います！俺はただ、フラグ強化をしようかと」

は「何処のギャルゲやねん！色々女の子侍らせてええ度胸やね？」

みるみるうちにはやての顔に怒りが見えてきた。

ティグ「いや、俺はただハーレムを作りたいだけです！」

は「十分悪いわ！あんたは何人の女の子を攻略する気なん？」

ティグ「そんなの俺に関わってる女の子全員に決まってるじゃないですか。」

は「は、あんたは女の子なら誰でもええんかい！」

ティグ「いや、そんなわけないじゃないっすか。只逢う人逢う人魅力的な女性ばかりなんですよん。」

は「……確かに私以外は全員可愛いとか美しい人ばかりだもんね。」

ティグ「何言ってるんですか？俺は一番好きなのは、はやてだよ？」

は「————ッ！！そ、それ……本気でゆうとるんか？」

ティグ「？本気に決まってるじゃないですか。俺が嘘つかないのは知ってるでしょ？」

は「ま、まあ確かに嘘ついた事はあらへんけど、」

ティグ「ってことでリィンを貸してください。」

は「そういう事だったらええけど、絶対に変なことに使ったらあかんよ？」

ティグ「ええ！任せてください。」

はやてはおもむろにバッグを開けると簡易式のリインの家になっていた。

は「リイン、あんたに面会やで？」

リイン「ん、うん、めんくい？」

は「誰がメン食い何て言った？私は面会と言ったんや。」

リイン「もう、こんな時間に誰ですか？」

は「それがティグレなんよ。」

ティグ「つよ！！お前は寝てたのか？」

リイン「は！？そうでした。私はこの時間にティグレさんと約束をしていました。」

ティグ「そうだよな？ロビーで待ってるって言ってたのにね？それはどういふことかな？」

リン「うゝッ！申し訳無いです。」

ティグ「そうだね、約束も守れないなんてね、守護騎士失格なんじゃない？」

リン「め、面目無いです。」

ティグ「まあ今は良いから少し外で話さないか？」

リン「はい、分かりました。」

そう言って俺達は外に出た。

……そして起動六課入り口付近

ティグ「こうして話すのも久しぶりだな。リン。」

リン「はい。そうですね。もう1年くらいはゆっくり話なんてしてませんよね。というかティグレさんが旅にお出掛けになっていたからお話なんて出来なかったんですけど。」

ティグ「そうだな、俺は一番忙しい時期に皆と一緒に居てやれなか

ったからな。起動六課が始まったからには俺は皆ともお前とも一緒にいる予定だから安心していいぞ?」

リン「それはありがたいことです。でも今日はこんな事を言うために私を呼んだ訳じゃないですよね?」

ティグ「流石だな。じゃあ単刀直入に聞くが……リンは好きな奴とかいるのか?」

リン「……………はい?」

ティグ「だからな、お前には好きな奴とかはいないのかなって思ってたわけだよ。」

リン「——ッ!!!! な、なな、何を言ってるんですか? いきなり!!!!!!」

ティグ「顔を真っ赤にして……可愛ええ奴じゃのう。」

リン「だ、だだだだってい、いいいきなりティグレさんがそんなことを言い出すからいけないんじゃないですか!!!!!!」

ティグ「そんなに驚くことか？俺はただ単に聞きたいだけだぜ？」

リン「そ、そそそういうティグレさんはどうなんですか？」

ティグ「ん？俺か？俺はいるぜ？」

リン「意外に普通に言うんですね。正直驚きです」

ティグレの心の中

《はあゝめっちゃ緊張したゝ、いきなりおれにきいてくるんだもん
なゝ。不意打ちは卑怯でゴザルヨ。》

ティグ「じゃあ次はお前の番な。」

リン「わ、私はゝ……………いい、いますよ。」

ティグ「そっか、じゃあ俺はもっと頑張らないとな……………よし。
じゃあ帰るか！」

リン「はいです！」

こうして俺達の1日が終了した。

第25話 「小さな騎士との夜」 (後書き)

何だろう、リインのフラグを立てたかったのに何故かしらはやてのフラグを立ててしまった。作者のハルジオンです。

な「まあまあそういうのも日常茶飯事じゃないですか。あ、どうも高町なのはです。」

何でこんなことになってしまったんだ。

な「まあまあ、そういえばリインの好きな人は誰なんでしょうかね？」

実はまだ決めてないんですよ。

はっはっはっはw w w w (＊＾m＾＊) ムフツ

な「(p┘;)／(＾＾)」

え？何？そのまだ決めてないのかよ、ドンマイみたいな絵文字は。

な「いや、何でもないよ……………はあ」

え？何故にため息？怖いよ？怖いんですけど（泣）

な「さあ次回のリリカルなのはStrikerSは？」

話題を変えやがった！……でもまあいいや。

さて次回は第26話「エースオブエース」です。お楽しみに！

♪へ（^o^へ）（ノ^o^）ノ♪

第26話 「エースオブエース」

初日の訓練が終わった次の日もまたもや早朝訓練だった。
なので俺は訓練スペースにいるであろうなのはさんの所へ向かった。

ティグ「なのはさん、おはようございます。」

なのは「あ、ティグレ君おはよう、早いんだね。まだ朝の4時なのに」

ティグ「自分はあまり寝ない体質なんでいくら疲れて遅く寝ようとも決まった時間には必ず起きるんですよ。」

なのは「そうなんだ、でもちゃんと寝なきゃダメだよ?」

ティグ「それはなのはさんですよ。いつも朝から晩まで俺達に付きつきりなんですから、体調のことも考えてくださいよ?」

なのは「心配してくれるんだね。でも、大丈夫だよ。いついかなるときも出勤可能のようにはしてるから。」

ティグ「そうですか? ならいいんですけど。」

なのは「あ、そうそう、今日の午後辺りにはやてちゃんの所に行ってくれるかな？リミッターの制限の話があるみたい。」

ティグ「あ、はい。分かりました。でも何で俺に直接話さなかったんでしょうね？同じ屋根の下に住んでるのに。」

なのは「何か報告するのを忘れてたらしいよ？」

ティグ「いや、違いますね。あの人のことだから俺になのはさんのフラグを強化しろってことなんですネ！」

なのは「ふらぐ強化ってなに？」

ティグ「あー、っと、そ、それは………そうです！！なのはさんの友好度を上げろってことですよ。」

なのは「ゆうこうど？？？」

ティグ「えーっと………もっとお友達になりましょうって事です。」

なのは「え？でも十分お友達以上だと思うんだけど。」

ティグ「それは家族としてでしょう？」

なのは「それは、まあそうだけど。」

ティグ「ですから俺はなのはさんを恋愛対象として見たいと言ってるんです。」

なのは「……………ふえ？それ、本気なの？」

ティグ「超本気です！じゃないとこんな事言いませんよ。」

なのは「それは、正直嬉しいんだけど、私は仕事が一番だから恋愛の方には傾かないよ？」

ティグ「あ、いえ俺は只知っててほしかっただけですから。」

なのは「そっか、じゃあそのお話は私がちゃんと受け取りました。」

ティグ「はい、そうしといてください。」

なのは「さて、そろそろ皆が来る時間だね。色々準備をしないと、ティグレ君手伝ってくれるよね？」

そんな天使のようなニコリスマイルをされたらやるしかないじゃないッスか！！！！

ティグ「良し！何でもやりましょう！このティグレ・イルシオンにドンと任せといてくださいよ！」

なのは「にゃははゝ、そう言ってくれると助かるよ。」

なのはさんの《にゃははゝ》キターWWW
ああもう俺このままでは萌え殺される。
何とか耐えなければ。

なのは「？ティグレ君何してるの？」

ティグ「え！？あ、すいません、すぐいきます。」

なのは「もうティグレ君ったらしょうがないんだから。」

ブシューー!!!!!!

なのは「ちよっ、ティグレ君大丈夫!？」

ティグ「あ? はい。だい…じょうぶでふ…ガクッ」

なのは「とりあえず医務室に運ばないと。」

起動六課医務室

ティグ「う?? うゝんここは?」

シャル「ここは医務室よ? ティグレ君が顔血だらけで医務室に運ばれてくるんだもん。ビックリしたわよ?」

ティグ「あー、何かだんだん思い出してきました。」

シャル「一体何があったの?」

ティグ「実は俺……なのはさんに萌え殺されそうになったんです。」

シャル「……………」

ティグ「……………」

シャル「それ、本気で言ってる？」

ティグ「大マジです。」

????「くっくくく!!、あははははは!!駄目や!!もう耐えられへん!!なんやそれ!!あははははは!!」

ティグ「ちょっ、はやてまでこんな恥さらしを見に来たんですか？」

はやて「ふふふ、ち、違うんよ。私は本当に心配で様子を見に来たんやから。愛しのティグレの為にな。」

ティグ「愛しのなんて恥ずかしい事言ってくれますね。何か照れてきちゃった。」

シャル「まあもうはやてちゃんとそういう関係だったのね？」

ティグ「いや、俺はシャル先生の事も好きですよ？」

シャル「あら、じゃあ具体的にどんな所が好きなのか聞こうじゃない？」

ティグ「そうですね、まずは巨に……バシンッ！！
いったー！！なにするんすか！？はやて！」

はやて「いやー、ちょい手が滑ってな？別に悪気があったわけやらへんよ？」

ティグ「あのー、そんな殺意の目で見ながらハリセンを振り上げるのは止めてください！！
ホントに俺が悪かったッス！すんませんでした！」

はやて「もう今後一切巨乳と言わへんか？」

ティグ「それは……無理かと。」

はやて「何でや？」

ティグ「それは……はやてだって良いスタイルしてるし……胸大きいし……可愛いし……もしそういう事をする事になったら……ねえ？」

はやて「――――ツ!？」

ティグ「しかも俺の周りの人って大抵胸がふくよかな方々が多いから男としてはその辺に目がいつてしまうのはしょうがないことだと俺は思いますけどね。」

はやて「た、確かにそれは一理あるがそんなことは今はどうでもエエんや！
今言いたいこと!……それは!!」

ティグ「そ、それは？」

はやて「次回のお楽しみや!!ほなまたな」

ティグ「そういうオチかい!!」

第26話 「エースオブエース」 (後書き)

一人一人のフラグ強化があまりうまくいかない今日この頃皆様は如何お過ごしでしょうか？

私は色々な電波やら何やらを受信出来ません。

正直私は書いていて良いんでしょうか……

ティグレ「大丈夫だよ(〇～ー) b 作者は強い子！」

でも私的には早くティグレのライバル的なものも出さなきゃいけないから戦闘描写書きたいんだよね。

ティグレ「じゃあもう書きちゃえば？ (笑)」

まだ一部しかフラグ強化してないじゃないか!!
そんなんじゃない気がするんだよ!

ティグレ「確かにハーレムを目指す俺としてもここは大事だしな！」

だから頑張って書いてるんだよ!
つゝことで次回のお話は、フェイトさんのフラグ強化でもしてみようかと思えます。

ティグレ「それは楽しみですね！」

じゃあ次回も楽しみにしてる人はお楽しみに。

第27話 「古代ベルカの融合機」

ティグレ「今日は俺に訓練を付けてくれませんか？」

久しぶりに俺はフェイトさんを見つけたから声を掛けてみた。

フェイト「朝から夕方までは用事があるから出来ないけど夜なら出来るよ？」

ティグレ「フェイトさんが大丈夫なら全然OKッスよ！キリッ」

フェイト「うん、じゃあ空いたら連絡するね。」

ティグレ「はい！お気をつけて！！」

フェイトさんが見えなくなるまで送ってやった。
そして俺は、

ティグレ「さて、訓練の前の訓練をしとくか。」

そう思い俺は起動六課裏の林に来た。

ティグレ「さて、まずは、このツインバレルからか……オプロクラ
トリアモードツインバレル」

《OK、モードツインバレル》

ティグレ「後ターゲットも数百個出してくれ。」

《了解したでゴザル》

ティグレ「ここだと人目に付く……じゃあ場所変更、訓練スペース行こう。」

《Masterの指示に従うだけだ。》

ティグレ「じゃあ速攻で行きますか!」

《ソニックムーブ!!》

シュッッ!!!!!!!!!!

ティグレ「よし、着いたな。あ、丁度なのはさんがいるから使わせてもらうか。」

ティグレ「なのはさくん！」

なのは「あれ？ティグレ君どうしたの？」

ティグレ「いや、ちょっとリミッターが掛かってからまともに訓練をしてなかったんでやっとうかと思いはのはさんに訓練スペースを借りれないかなと」

なのは「あゝそういうこと、なんなら私が訓練を付けてあげようか？私も思いつきり体を動かしたいし。」

ティグレ「本当ですか？そっちの方が俺も練習に集中できるんですよしく願います。」

シグナム「そういうことなら私も参加させてもらおうか？」

ティグレ「シグナム!! どうしてここにいるんだ? 何か仕事がどうとか言ってなかったか?」

シグナム「ああさつきまであったが早く終わらせてすぐ帰ってきた。私も少し体を動かさないとな。」

ヴィータ「あたしもいるけどな。」

ティグレ「おおヴィータいたのか、ちっちゃくて全然気付かなかった!」

ヴィータ「ちっちゃくて悪かったな! んで、あたしも訓練に参加させてもらうからな。」

ティグレ「何だか昔の事を思い出してしまうな……あの頃は本当に辛かったな」

なのは「じゃあ訓練の内容はどうする? 普通に2…2で別れて模擬戦でもしますか?」

ティグレ「いや、1…3で良いよ。俺が一人であとそっちが三人。」

シグナム「本当にそれで良いのか？ ティグレ、辛くないか？」

ティグレ「全然、これくらいやらないと訓練になりませんから。」

なのは「じゃあ今から訓練スペース作るから。」

そう言う手早い作業でなのはさんが訓練スペースを作ってくれた。

ティグレ「じゃあ俺今回は陸で戦いますから。三人は空から良いですよ。」

なのは「それじゃあ、レイジングハート」

シグナム「レバンティン」

ヴィータ「グラフアイゼン」

「「セーットア————ッブ!!!!!!!!!!」」

三人とも空中に飛んだのを確認してから俺も変身する。

ティグレ「オプロクラトリア、セットアップ。」

俺はどす黒い色に包まれてみるみる服が変わっていく。

どことなくシグナムのバリアジャケットに似ているが色は真っ黒で背中には天下無双と金の文字でデカでかを書いてあった。

ティグレ「へえー、俺のバリアジャケットってこんなんになったんだ。……結構かっこいいじゃん？」

なのは「それじゃあ始めるよ、内容はどちらかが全員戦闘不能になるまで続けるよ。じゃあよい………スタート！」

スタートと言った瞬間俺の方に速攻で向かってくる2つの光、それを俺は

ティグレ「クラトリア！モード、ツインブレイド」

《了解した》

俺は真っ赤に光ったツインブレイドを手待ち構える体制に入った。

ヴィータ「てええいややや！」

やはり予想通りヴィータが最初に来たか。

カキンッ!!

ヴィータの初撃を受け流すとすぐにシグナムのレバンティンがすぐさま俺の目の前まで来た。

俺はそれを紙一重で回避して、

ティグレ「モード、ツインバレル」

ツインバレルに変えて大量の魔力弾を作り、

ティグレ「アクセルシューター！」

《アクセルシューター》

それと同時に上から桃色の魔力弾が飛んできたのを一個一個丁寧に撃ち落としていく。

さすがにBランクだから激しい動きは出来ないから少々辛いが、なのはさんの魔力弾を撃ち落とすくらいなら容易いからな。

さて、次は、

ティグレ「モード、太刀」

そして俺が持ったのは、長さが3mありそこからまた何mか延びる武器だ。

これを俺中心に円を描くように振り回す。
カシャンッ！！…ブウォオンッ！！！！

ティグレ「土埃で俺の姿は見えないだろう。
今のうちに、モード、シールドバスターライフル！」

これのチャージ時間が必要だから姿を見えないようにしてんだぜ！
って誰に喋ってんだか。
そんなことより戦いに集中しなければ。

ヒュンヒュンヒュンヒュン
どんどん溜まっていく魔力弾

ティグレ「これ撃つたらもう動けなくなるよな」

《3……2……1……撃てます。》

ティグレ「よし、じゃあ……バレルッ！！バスター————ッ！
！！！！！！！！」

キュー————ンッ！！
ズドドドドドンッ！！！！！！

なのは「プロテクションも間に合わないしこれは避けれない。」

シグナム「ギリギリ間に合わないだと。」

ヴィータ「あんなのかわせねえよ!!」

ズド————ンッ!!!!

なのはさん達に撃った砲撃は半径25m程の緑色の魔力砲だった。
三人の女の子が空から落ちてくる。それを俺は、

ティグレ「ソニックムーブ！」

《ソニックムーブ!》

シュンッ!

瞬時に三人を抱き抱えゆっくり地面に着地する。

ティグレ「一応シャル先生の所で見てもらいましうね。」

起動六課医務室

ティグレ「シャル先生！」

シャル「あらあらどうしたの？……って三人ともどうしたの！？」

ティグレ「実は……」

俺は粗方な内容をシャル先生に話した。

シャル「まあまあそれは大変だったわね。まあ後はこっちで安静にさせとくから、ティグレ君は昼食でも食べてて。」

ティグレ「そうします。三人とも起きたら連絡を下さい。」

シャル「分かったわ。」

そして医務室を後にし、食堂へ向かった。

起動六課…食堂

ティグレ「さくで、今日のお昼はなんだろうな♪」

エリオ「あ、兄さん!!」

ダッダッダッダッ!!

ティグレ「ちょっと待て、今こられても受けられな……ゴフッ!!」

エリオには聞こえず俺は10m位吹っ飛ばされた。

エリオ「兄さん!大丈夫?」

ティグレ「グフッ……これが大丈夫に見えるか?」

エリオ「そうだね、ごめんね。」

ティグレ「いや、良いよ。んでどうしてエリオがタックルをしてるのを見てるのに止めようとしないんだ?お前ら」

スバル「い、いや〜ティグレなら大丈夫かな〜と思ったんだけど。」

ティグレ「ティアナは？」

ティアナ「私やキャロがエリオを止められると思ってんの？どう考えても無理でしょ。」

ティグレ「ですよねWWW聞いた俺がバカだったよ。」

スバル「まあそんなことよりお昼ご飯食べにいこ♪」

ティグレ「ん？ああそれもそうだな。」

そして俺達は食堂のテーブルに腰を掛けスバルとエリオが食事を持つてくるのを待っていると、

ティアナ「そういえばさっきあんた訓練スペースにいなかった？」

ティグレ「な！？何で？」

ティアナ「さっき隊長達が訓練スペースからあんたが運んでいくのを見たから」

ティグレ「見られてたか」

ティアナ「ねえ、何があったの？話したくなかったら良いんだけど。」

ティグレ「まあ、あれは俺のせいだからな。全部話してやるよ。」

そう言って俺は大体のあらすじを話した。

ティアナ「ふう〜んそんなことがあったんだ。」

ティグレ「ああ、正直やり過ぎたかなと思ったよ。」

ティアナ「それで？隊長達は大丈夫だったの？」

ティグレ「あ、うん、取りあえずは大丈夫だよ。体には異状はないようにしてあったから。」

ティアナ「そう、じゃああんたが訓練の教導官やんなさいよ。」

ティグレ「……………は？今なんと仰いましたか？」

ティアナ「聞いてなかったの？だから、あんたが私たちの教導をしなさいって言ってんのよ。」

ティグレ「いやいやいやいや、何故に俺とですか？まあ確かになのはさん達を撃ち落としたのは俺だけど、何も俺がやることもないんじゃないね？」

ティアナ「じゃあこのあとの教導はどうするのよ。」

そう言った直後シャル先生から連絡が入り皆が目覚めたそうなのですぐに医務室に向かった。

起動六課…医務室

ティグレ「皆さん大丈夫ですか!？」

なのは「あ、ティグレ君、うん取りあえずは対したことは無いよ。」

ティグレ「良かった、すいません。何か俺のが避けられなかったみたいで。」

なのは「あれで魔力ランクがB+何て信じられないくらいの砲撃だったね。」

ティグレ「いやいや、魔力を押さえて威力強化の訓練をしてたらそうだっただけで、努力の結晶って奴ですよ。」

シグナム「それでも、そこまで努力して私達を倒せるんだ。誇りに思っていると思うぞ。」

ティグレ「そうですか？俺的には決まったパターンで動いてくれたから楽にいましたけど、それはシグナム達の手加減なんですよね？」

ヴィータ「何だ、全部バレバレじゃねえか。どんだけ頭がいいんだお前は。」

ティグレ「チゲーヨ！これも色々修行の旅に出て、色々な奴と戦って分析した結果だったの！」

なのは「一体いくらの敵と戦ったんだろうかね。」

ティグレ「そうですね……………ざっと思ひ出すだけで数千でしょう
か。」

シグナム「まるで私達の時代の生き残りのような言い方だな。」

ティグレ「シグナム達と同じ時代の融合機なら拾ってきましたけどね。」

ヴィータ「何だって!!!!? そいつは今どこに?」

ティグレ「まあ落ち着け、そいつは今俺の部屋にいるが、俺が魔法を掛けているから見つけることは出来まいよ。」

シグナム「その融合機をどこで拾ってきたんだ?」

ティグレ「そ、それは……………」

第27話 「古代ベルカの融合機」 (後書き)

いや、何か新しいキャラの登場フラグを立ててしまった作者のハルジオンです。

さて今回の作品はお楽しみ頂けたでしょうか？

え？全然フラグ強化じゃねえじゃねえかって？

はい、その辺は大変申し訳なく思っております。

フラグ強化をしようと思ったらこんな結果に……

まあこんなこともあるよね！

何事もポジティブに考えれば人生楽しくなるさ！

てな訳で次回もお楽しみください。

第28話 「古代ベルカの融合機との出会い」

シグナム「お前はこういう手順でその融合機を手に入れたのだ？」

ティグレ「……………」

もう何時間こんな話をしていた俺はいつまで無言を突き通せば良いんだろうか。

ヴィータ「無言じゃ分かんないじゃんか！何か理由があるんだろう？それを話してくれればいいんだよ。」

もういつそ話してしまった方が良いのではないか？
否、今言ってしまうばあいつはどうなる？もうちょっと探りが必要か。

ティグレ「仮に……」

Side…シグナム

ティグレ「仮に……その融合機を渡すとするじゃないですか？そしたらその融合機はどうなるんですか？」

ティグレは一体いきなりなんの話をしてくるかと思えば、それは、確率的には保護センターに送られるだろう。だが、ティグレはそれを望んでいないと見る。

ああ、私はどうしたら。

S i d e .. シグナム 了

俺は思いきって質問を投げ掛けた。少しの間沈黙が続いたが、口を開いたのは……

なのは「それは勿論ちゃんとした検査を受けて保護センターに送られると思うよ。」

ティグレ「……れじゃあ」

なのは「え？」

ティグレ「それじゃあ！！駄目なんですよ！！！！！！！！」

なのは「ビクッ！！……………ど、どうして？」

ティグレ「俺は何回もその見つけた融合機を管理局の保護センターに渡しました。それが管理局の命令でしたから。ですが、後日俺はまた融合機が送られた保護センターに向かい、様子を見に行きました。

すると、なんと研究者が俺の拾った融合機を実験の道具に使ったんですよ？これが皆さんには耐えられますか？」

「「……………」」

ティグレ「俺は耐えられないですけどね！！そんなの……………例え神様が諦めたって俺は諦めたくないんですよ！！だから俺は罪にとられようとも俺は良い、だけど俺の大事な奴を奪われるのはもういやなんですよ！！」

Side…シグナム

ティグレ「……………もういやなんですよ!!」

まさかこんなにティグレが熱くなるなんて、もしかしたら初めて私達がティグレに大声で叫ばれているのではないか？

皆ティグレの言葉に啞然としているし、ここは私が何か言うしかないな。

Side…シグナム 了

俺の言葉に皆啞然としているし、もしかして俺……言い過ぎた？
すると意外にもシグナムから言葉が来た。

シグナム「解った。保護施設には渡さなくてもいい。」

ティグレ「じゃあ!!—————」
「ただし!!」
「————え？」

シグナム「高町教導官とテストロッサ、それに私達家族だけにでもいいから見せてくれ。」

ティグレ「シグナム……………分かったよ。じゃあ夜になのはさんとフェイトさんは二人で八神家へお越してください。俺が迎えにあがります。」

なのは「分かった、じゃあフェイトちゃんには私が言っとくよ。」

ティグレ「じゃあ俺はヴィータとザフィーラとはやてに言っときます。」

シグナム「いや、ヴィータとザフィーラには私から報告しておこう。」

ティグレ「じゃあ俺は今から、はやてに報告してきます。…………グスッ」

俺は涙の出そうなのを食い芝って部隊長室に走って向かった。

起動六課…部隊長室

タツタツタツタツ!!

とりあえず……はあはあ……着いたが……ま、まずは息を……はあ
はあ……整えなければ……
すうーはあーすうーはあー

ティグレ「よし!!」

Side..はやて

はやて「よし!これで少しは休憩取れるな!」

リン「はいです。もうお腹ペコペコです。」

はやて「せやな、じゃあティグレでも誘って食堂にいかか?」

リン「行くです。」

コンコンコン

Side..はやて了

コンコンコン

はやて「はい、どちら様ですか？」

ティグレ「俺だ……はやて、」

はやて「ティグレ！ナイスタイミング！！ええよ入って！」

はやての言葉が来たのでまず入る。
そういえば、俺…なんて説明すれば良いんだ？

はやて「ん？ティグレ、凄い汗やね？大丈夫か？……あ！もしかして私に会いに来るために走って来てくれたんか？何や嬉しいな〜！
」

ティグレ「いや、これは只の冷や汗だ。気にしないでいい。」

はやて「冷や汗？何で冷や汗なのかは聞かんどいたるわ。これから食堂行くんやけどティグレも行かへんか？」

ティグレ「分かった。じゃあその時に話すことがあるから話すよ。」

起動六課…食堂

そして俺は食事中に俺と融合機の話をした。

ティグレ「これで、言いたいことは全部だ。後は見て、話して確認してくれ。」

はやて「百聞は一見にしかずってやつやな。でもまさか家に融合機がリインの他にもいるとは驚いたな。全然気いつかへんかったわ。」

ティグレ「それは俺の魔法で姿を消して、俺の技能で自分以外でも気配を消させることが出来るんだよ。」

はやて「はへえ、ティグレは何でも使えるな！」

ティグレ「なんでもじゃねえよ、使える技だけだ。」

はやて「分かった。じゃあ今日の夜は早めに帰って晩御飯の準備をしとけばエエんやな？」

ティグレ「まあ飯食ってからでも遅くはないだろ。俺はなのはさんとフェイトさん呼びにいつてくるからその間にヨロシク。」

はやて「了解や！」

そして時が経ち午後7時30分なのはさんとフェイトさんの部屋に着いた俺、何で待ってるかって？
それは30分前

なのは「あ、ティグレ君？ちょっと待ってね今から私とフェイトちゃん用意するから。」

……が、これである。

なのは「ごめんね。待たせちゃって、」

ティグレ「いえいえ、じゃあ、はやてがお待ちですので向かいますか。」

そして俺は、そそくさと自分家へ向かった。

P M 2 0 .. 0 0 .. 八神家

はやて「いらっしやい、なのはちゃん、フェイトちゃん。」

なのは「お邪魔します。はやてちゃん。」

フェイト「久しぶりにはやての家に来たんじゃない？」

はやて「せやねー最近は仕事が忙しいもんな。今日はゆっくりしてってな？」

ティグレ「まあとりあえず晩飯でも食いましょうや。」

そう言って俺達は食卓を皆で囲んだ。

ティグレ「今日のご飯は誰が作ったんだ？」

はやて「ああ、今日はな、何とシャマ————「ちょっと待て————ん？どないしたんや？」

ティグレ「まさかシャマルが作ったとか言わないよな？」

シャマル「なにそれ？私が作っちゃいけないの？」

ティグレ「いや、別にダメって訳じゃないけど……ねえ。ちゃんと食える？」

シャマル「大丈夫よ。今日は、はやてちゃんと二人で作ったから。」

ティグレ「ほ……なら安心して食えるな！」

シャマル「何かトゲのある言葉だけど今日は許してあげるわ。」

そんなこんなで皆で楽しく食事を楽しんだ。

ティグレ「……さて、ここからが本題だな。じゃあこれから一人ずつ俺の部屋に来てくれ。順番は誰からでも良いからな。」

そして、皆でマジでじゃんけんを始めた。

はやて「誰が最初に勝っても恨みっこなしやで？」

「わかってるよ。」

はやて「ほないくで?.....」

「
「
「
「
「
「じゃんけん」
「
「
「
「
「[illegible]

それを何回かやって順番が決まり一人づつ俺の部屋へと入ってきた。

第28話 「古代ベルカの融合機との出会い」 (後書き)

どうしてこうなったOTL

どうもハルジオンです。

次回からは新キャラが出てきますが、正直構成が全く決まってる。ん。

まあ気長に頑張って決めますか。

それでは次回もお楽しみにお願い致します。

第29話 「新しい仲間……そして……」

シグナム「失礼する。」

ティグレ「最初はシグナムか、良いよ入って。」

俺達の対談が始まった。

ティグレ「とりあえず挨拶だけは済まさないとな。じゃあシグナムからどうぞ。」

シグナム「うむ、古代ベルカ夜天の書の将、管理局空戦魔導師シグナム二尉です。武器はこのレバンティンよろしくお願いします。」

ティグレ「うーん、固いなーシグナム緊張してるだろ。」

シグナム「そ、そんなことはないそんなことは気にするな。」

ティグレ「まあ良いや、じゃあ次クオン、よろしく」

クオン「りょうかいやーマスター」

Side…シグナム

私の目の前にはリイン程の身長しかない融合騎なのに物凄い威圧感がありやはり古代ベルカの融合騎なのだと私の危険察知が響き渡る
《……コイツハ…ヤバイ…》と。

Side…シグナム 了

ティグレ「おいクオン、何でいきなり殺気を飛ばしてんだ？」

クオン「すんまへんな」闇の書の将をやってる言うもんやからどんなもんかなあ思いまして。ですが、まあ中々の胆力とちゃいますか？」

ティグレ「はあ……全くクオンは仕方のないやつだな。まあ……まだ本気で殺気を飛ばしてる訳じゃないからまだ良いがな。」

シグナム「何？あれで本気を出していないと言うのか？だとしたら

コイツは凄い奴だな。」

ティグレ「俺なんか最初に逢った時なんてマジで殺気だけで死にかけたんだぜ？」

クオン「まあその時のウチは色々と自意識過剰になってもうたからのう、その時は済まないことをしてもうた。」

ティグレ「いやいや、もうその事は気にしてないから、っとそうだよ俺の話しても意味ないんだよ。シグナムから質問とかはないのか？」

シグナム「それでは……ユニゾン出来るのはティグレだけにしか出来ないのか？」

クオン「そんなことはあらへんで？せやけど、ウチはこの人をマスターと決めた、だからマスターが他の人をサポートしろゆうなら喜んでユニゾンいたします。」

シグナム「貴殿は何の変換資質を持っているのだ？」

クオン「貴殿と呼ばずに気軽にクオンとお呼びください。変換資質の話でしたなあ、ウチは主に電気資質を使います。まあ他にも使え

るもんはあるんやけど。」

シグナム「クオン……で良いのか？」

クオン「はい、よろしいですわ。」

シグナム「クオンはどういう経緯でティグレと出会ったのだ？」

クオン「うーん、これは下にいる皆さんにも聞かせへんといけんよなあ。なら一回で済ませた方が良くとちやいますか？」

ティグレ「確かに………じゃあこれから下に降りるか。」

クオン「ほんならいこか」

そして俺達は一人ずつだったはずが結局全員で話し合いをする事になった。



はやて「ほんで？その子がティグレの融合騎って事でエエんか？」

ティグレ「そうだよ。コイツが古代ベルカの融合騎、名前はクオンと言う。クオンお前から挨拶を……殺気を飛ばすのはやめろよ？」

クオン「只今紹介に預かった融合騎クオンと申します。皆さんとも仲良うなれるように楽しくいきましょくな。」

そして他の人たちも自己紹介が終わった。

ティグレ「さてじゃあ何か質問とかはないのか？何でも良いからな。」

はやて「それじゃあクオンちゃんはティグレの事どう思ってるん？」

クオン「それは命の恩人だと思っていますし私の初恋の相手ですよ？そして私のマイマスターです。」

はやて「またティグレはハーレム一直線やな。」

ティグレ「いやゝそれほどでも」

はやて「誰も褒めとらんわ！寧ろ強敵出現やないの！」

ティグレ「大丈夫です。私はある人を除いては皆に平等ですから。」

なのは「その一人って誰の事なんだろう？だろ？」

ティグレ「そんな殺気立たないでくださいよ。恐くて夜も眠れませんよ。」

なのは「だって気になるんだもん。」

ティグレ「それは……いつか分かりますよ。って俺の事はいいですよ！今はクオンに対しての質問でしょ？」

なのは「そうだったね。じゃあ私から………いつこの時代に目覚めたか覚えてる？」

クオン「正直自信はありません、せやけど目が覚めたときは辺り一面真っ白な雪に埋め尽くされてたんです。」

なのは「その時は建物の中にいたの？それとも外いたの？」

クオン「凄く暖かい場所やったから多分どこかの研究施設とちやいますか？そこで怖いおじさま達から拷問のような仕打ちを受けていたんです。」

ヴィータ「例えばどんな事をされていたんだ？」

クオン「そうですね。最初は血を抜かれて1週間は飲まず食わずでしたなあ。」

それから1ヶ月が経った頃に、ウチに良くわからん薬を打ってウチの能力を無理矢理引き出しやがったんです。

あの時はマジで死ぬんじゃないかと思った時もありましたさかい、それを3ヶ月も続けられウチの身も心もボロボロになっていた時にマスターが現れたんです。」

フェイト「そんな酷い事が起きていたなんて……信じられない。」

ティグレ「でもこれが真実だからなあ。ここからは俺が説明しますよ。」

そこで俺が見たのはこんな小さな融合騎が誰彼構わずユニゾンさせられている光景でした。

ユニゾンには結構な体力がいるのに1日に何十回もユニゾンさせられて……それを見た瞬間に俺は体が勝手に動いてました。

気が付いたときにはその研究施設をぶっ壊してクオンを掌に乗せていました。」

シャル「え？それって？」

ティグレ「そうです、俺は物凄い大罪を犯して今ここにいます。どう思いますか？こんな俺を……」

はやて「私たちは全然気にせえへんで？私らだって重罪を背負わされとるんやから。なあフェイトちゃん？」

フェイト「そうだよ、そんなんで大罪って言ったら私達は死罪級の罪を犯してるんだよ？」

ティグレ「いえ、俺はこれからも不幸が降り注ぐらしいんだよ。だから俺は皆とはもう逢えないかもしれない。だから俺は今日皆に融合騎の話をしたんだよ。」

はやて「そんな事あるわけないやん、仮にもしそんな事があつたら私らはどう生きていけてゆうつるん？」

ティグレ「その時はその時で現実を見てもらいたいですね。」

シグナム「そんなの……————」「え？」————「そんなティグレがいなくなるなんてそんな事になったら私は……私は……グスッ」

ティグレ「シグナム………そんなに俺を心配してくれるんだな……正直嬉しいよ。」

ヴィータ「何言ってんだよ！ティグレはもうあたしらの絆の真ん中の存在なんだよ！そりゃあ心配もするし悲しんだりもするんだ。だからシグナムだってあんなになってまでティグレを心配してくれてんだろうが！そんな事も分からねえのか？」

ティグレ「………すまん……グスッ………本当に………済まない………だが、俺はこれから不幸なことが起こると俺自身がそう語ってんだ。」

ザフィーラ「お前はそんな能力いつから使えるようになったんだ？俺らはそんなの知らないぞ？」

ティグレ「この予知能力は俺が生まれた時から備わってたらしいん

だよ。初めてこの能力に気付いたのは旅を初めてからだけだな。
んで、その能力によると俺は近いうちに何かに巻き込まれて大事な
人達と離れ離れになるって予知夢で見たんだ。」

ザフィーラ「それはまた奇怪な話だな。本当にそんな事が起こるの
か不思議だな。」

ティグレ「でも、予知しちまったんだから仕方なくね？」

シャル「まあ、確かにそうだけど。何か納得いかないわね。」

ティグレ「じゃあ今回はこんな所でお開きにしませんか？ 皆さん明
日も早いだろうし。」

はやて「そ、そうやね。ほなまた明日も頑張っていこうな？（笑）」

そして俺達は解散となった。

昼頃…研究室

俺達はフォアード四人のデバイスを受け取りに起動六課研究室へや
って来ていた。

そこでシャーリーのデバイス説明会が始まっていた矢先

ウィーオン！！ウィーオン！！ウィーオン！！

突然サイレンの音

部屋の中は真っ赤にサイレンの光で照らされる。

エリオ「これって、一級警戒警報！？」

第29話 「新しい仲間……そして……」 (後書き)

はい、というわけで今回お送りいたしましたのが、オリャラ融合騎の話とファーストアラート寸前までを書かせていただきました。

尚、起動六課(前)を少し編集しましたので読み直して頂ければと思います。

感想などもお待ちしております。

不定期投稿になるかもしれません。

第30話 「ファースト・アラート前編」

ウィーン！！ウィーン！！ウィーン！！

スバル「え？……このアラートって……」

エリオ「二級警戒体制！？」

なのは「グリフィス君！！」

グリフィス「はい、教会本部から出動要請です。」

はやて「なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君。こちらははやて。」

なのは・フェイト「うん、————」「状況は？」————」

はやて「教会騎士団調査部で追ってたレリックらしき物が見つかった。」

場所はエイリム山岳丘陵地区対象は山岳リニアールエルで移動中」

「フェイト・なのは「移動中って!？」——「まさか!？」——」

はやて「そのまさかや、内部に侵入したガジェットのせいで車両の制御が奪われてる。

リニールエル車内のガジェットは最低でも30体。大型や飛行型の未確認タイプも出てるかもしれない。

いきなりハードな初出動や、なのはちゃん、フェイトちゃんいけるか？」

フエイト「私はいつでも」

なのは「私も」

はやて「スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、後ティグレ、皆もOKか？」

FWチーム「はい!!」

「後は余計だがやれるところまでやってやる。」

はやて「よし、ティグレ以外良いお返事や。シフトはA-3、グリフィス君は隊舎での指揮リインは現場観戦、なのはちゃん、フ

エイトちゃんは現場指揮

ほんなら、起動六課F W部隊出動!!」

F Wチーム「はい!!!!!!」

フェイト「了解皆は先行して私も直ぐに追いかける。」

同時刻…聖王教会

カリム「シャツハ、はやてを送ってあげて。起動六課の大社まで最速で、」

シャツハ「かしこまりました。騎士カリム。」

カリム「聖堂の裏に出て、シャツハが待ってる。」

はやて「うん、おおきになカリム、今日のお茶美味しかったよ。…
…ほんなら、行ってきます。」

同時刻…A F—704式内

なのは「新デバイスでぶっつけ本番になっちゃったけど、練習通りで大丈夫だからね？」

ティアナ・スバル「はい、———「頑張ります。」———」

リン「エリオとキャロ、それにフリードとティグレさんもしつかりですよ？」

エリオ・キャロ・フリード「はい——」「はい」——「キュクルウ——」

ティグレ「……………」

なのは「危ないときは私やフェイト隊長、リンとティグレ君がちゃんとフォローしてくれるから、おっかなびっくりじゃなくて思いっきりやってみよう！」

FWチーム「はい!!」

ティグレ「やっぱり俺もフォローする側なんですネ……」

なのは「何？何か文句でもある？」

ティグレ「いや、何も問題はない。」

リン「それから、ティグレさんはライトニングの方に入ってください。」

ティグレ「コイツらの様子見とフォローで良いか？」

リン「さっすがティグレさん、話の呑み込みが早くて助かります。」

ティグレ「って事だ。エリオにキャラ、それにフリードもよろしくな！」

エリオ「兄さんがいれば向かうところ敵無しだね！」

キャラ「……………」

ティグレ「ん？キャラ、どうした？元氣ないな。」

キャラ「え？あ、いえ、何でも…無いです……」

エリオ「兄さん……」

ティグレ「わーってるよ。俺に任しとけ！

ってことでキャロ、お前はあれだろ？どうせまた過去の事を根に持
ってんだろ？」

キャロ「……………はい。」

ティグレ「自分が傷付けちまうことに怯えてんだろ？

んなこと気にすんなよ。誰も怖いなんて思わないし、お前が辛いと
きは俺が過去の事みたく助けてやるよ。……だから気にすることじ
ゃねえよ。」

キャロ「お兄ちゃん……ありがとうございます。何か元気が湧いて
きました。」

ティグレ「そうか、また何か悩みがあったら言えば良いさ。俺のい
るときだったらいつでも相談に乗るからさ！」

キャロ「はい！！」

起動六課…隊舎

アルト「問題の貨物車両速度70を維持、以前進行中です。」

ルキノ「重要貨物室の扉はまだ突破されていないようですが、」

グリフィス「時間の問題か……」

ウィーン！ウィーン！ウィーン！

シャーリー「アルト、ルキノ広域スキャン！！サーチャー空へ！」

ルキノ「ガジェット反応！？空から！？」

アルト「航空型現地観測隊が捕捉、」

フェイト「こちらフェイト、グリフィス今こっちはパーキングに到着、車止めて現場に向かうから飛行許可をお願い。」

グリフィス「了解、市街地個人飛行承認します。」

なのは「ヴァイス君私も出るよ。フェイト隊長と二人で空を押さえる。」

ヴァイス「ウッス、なのはさん、お願いします。」

なのは「んじゃちょっと出てくるけど、皆も頑張ってズバツとやっつけちゃお！」

F W チーム「はい！」

なのは「とりあえず陸上の指揮はティグレ君にやってもらうからヨロシクね？」

ティグレ「俺も空で戦った方が良いんじゃないッスか？」

なのは「本当はそうしたいけど、F W メンバーは初ミッションだから色々見てあげなきゃいけないかなって」

ティグレ「まあ隊長命令なら俺は動きますよ。」

なのは「お願いね、」

パーキングエリア

B D A 《G e t S e t》

フェイト「バルディッシュアサルト、セットアップ！」

B D A 「S e t U p」

フェイト「行くよ、バルディッシュ」

B D A 「」

フェイト「ライトニング1フェイト・テストロッサ・ハラオウン行きます！」

A F ー704式..外空

R H 「」

なのは「レイジングハートセーットアップ!」

RH「」

なのは「スターズ1高町なのは行きます!」

AF-704式内

リン「任務は2つガジェットを逃走させず全機破壊すること、そしてレリックを安全に確保すること。

ですからスターズ分隊とライトニング分隊二人ずつのコンビでガジェットを破壊しながら中央へ向かうです。

レリックはここ7両目の重要貨物室スターズかライトニング、先に到着した方がレリックを回収するですよ?」

FWチーム「はい!!」

リン「で、私も現場に降りて観戦を担当するです。」

ティグレ「んじゃ、やはり俺の役目がないような……」

リン「そんなことはないですよ？あ、そうでした、ティグレさんには御届け物があつたんでした。」

ティグレ「俺に？」

リン「はいです！この子です。」

ティグレ「お前は！？クオン！！何でこんなところに？」

クオン「何で？ってマスターそれはヒドないか？ウチはマスターの融合機やで？なのにウチを連れてかないのは、おかしいんじゃないか？」

ティグレ「まあ確かにそうだが、お前を危険に巻き込みたくなかったんだが、ホントに来るのか？」

クオン「もうマスターは…ウチを誰だと思ふとるんですか？ウチは古代ベルカの騎士融合機ですよ？そんな行くに決まってるやないですか。」

ティグレ「だったらトコトン付き合ってもらおうからな！」

スバル「あ、あのー、ティグレ？」

ティグレ「ん？何だ？」

ティアナ「そのリンさんみたいなのは何なのよ？」

ティグレ「ああ、お前らには説明してなかったな、こいつは――」

ヴァイス「話してる最中悪いがもう着くぜ？」

ティグレ「おっと、じゃあこの話は帰ってから話してやる！だから今はこのミッションだけを遂行できるようにガンバレ！
んじゃ、行くか！」

FWチーム「はい！！！」

第30話 「ファースト・アラート前編」 (後書き)

一話で終わるはずが終わらなかった作者です。

クオン「どうも～主人公の融合機、クオンです～皆さんよろしゅうな？」

まさかあそこでクオンが出てくるとは俺も書いてて焦ってしまったよ。

クオン「それでもあんたが書いたんやろ？それで投稿するのはどうかと思うんやけど……」

いや、何か出来がまだ良かったからな！つい投稿をしてしまったぜ！
キリッ！！

クオン「はあ、もうどうでもエエわ、んで次の話はどんな話なん？」

とりあえずファースト・アラート完結してからまさかの急展開が……
…みたいな事を書こうかなと……

クオン「じゃあ早く書きなさいや！こんな後書きに時間を費やして

ないで。」

いや、オリジナルの話の内容が全くといって良いほど出てこないで
あります！

クオン「ウチの魔法であんた消したるか？（怒）」

いや、すぐ書きます今書きますだから消さないでくださいお願いします！
（泣）

クオン「てなことでもた次回をお楽しみにしててな？（笑）」

第31話 「ファースト・アライト後編」

A Fー704式..機内

ヴァイス「さあて新人共、隊長達が空を押さえてくれてるお陰で安全無事に降下ポイントに到着だ。準備は良いか！」

F Wチーム「はい!!」

スバル「スターズ3..スバル・ナカジマ」

ティアナ「スターズ4..ティアナ・ランスター」

ス・ティ「行きます!!」

スバル「行くよ、マツハキヤリバー」

ティアナ「お願いね、クロスミラージュ」

ス・ティ「セットアップ!!」

そしてスターズがセットアップをしていく中、機内では

ヴァイス「次!ライトニングチビ共気を付けてな。後ティグレもな。」

」

ティグレ「後は余計だバカ兄貴が！
まあ良い、んじゃ行くかエリオにキャロ、何なら手を繋ぐか？」

エ・キャ「はい！お願いします。」

エリオ「ライトニング3…エリオ・モンディアル」
キャロ「ライトニング4…キャロ・ル・ルシエとフリード・リヒ」
ティグレ「ゲストでライトニング、ティグレ・イルシオンと融合機
クオン」

エ・キャ・ティグ「行きます！」

エ・キャ・ティグ「ストラダー！…ケリュケイオン！…オプロクラ
トリア！」
エ・キャ・ティグ「セットアップ！」

作者から

全員の变身シーンは人それぞれの想像にお任せします。

スバル「あれ？このジャケットって…」

エリオ「もしかして…」

リイン「デザインと性能は各分隊の隊長さんのを参考にしてるですよ？」

ちよつと癖はありますが高性能です！」

ティグレ「まあ俺のはウチの家族全員のデザインと性能を参考にしてるがな。」

ティアナ「……あつ、スバル感激は後」

メコッ！！ベキッ！！ツドーン！！

ティアナ「ッ！！シュート！！！」

スバル「ウオオオオオオ！！！」

バンッ！！ドカーン！！

スバル「ッ！！タアアアアア！！！」

ドンッ！！バーンッ！！

ピュンッ！！ピュンッ！！ピュンッ！！

スバル「リボルバー！！シューッ！！」

ブウワンッ！！

スバル「うわああっ！？」

Mk「ウィングロード」

スバル「うわあ、マッハキャリバー、お前もしかしてかなり凄い？
加速とか、グリップコントロールとか……それに、ウィングロード
まで。」

Mk「私はあなたをより強く、より速く走らせるために作り出され
ましたから」

スバル「うん。……でもマッハキャリバーはAIと言っても心があ
るんでしょ？だったらちよつと言い替えよう、お前はね？あたしと
一緒に走るために生まれてきたんだよ？」

M k 「同じ意味に感じます。」

スバル 「違うんだよ、色々。」

M k 「考えておきます。」

スバル 「うん！」

リニアレール内

リイン 「ティアナ、どうです？」

ティアナ 「駄目です。ケーブルの破壊、効果無し。」

リイン 「了解、車両の停止は私が引き受けるです。ティアナはスバルと合流してください。」

ティアナ 「了解！」

しかし、流石最新型色々便利だし弾体生成もサポートしてくれるんだね？」

CR「はい。不要でしたか？」

ティアナ「あんたみたいな優秀な子に頼りすぎると私的には良くないんだけど、でも実戦では助かるよ。」

CR「ありがとうございます。」

リイン「スターズF、4両目で合流、ライトニングF、10両目で戦闘中」

起動六課隊舎

シャーリー「スターズ1、ライトニング1、低空権獲得」

アルト「ガジェット式型旋回開始、追撃サポートに入ります。」

はやて「ごめんな？お待たせ。」

グリフィス「八神部隊長」

シャーリー「お帰りなさい。」

グリフィス「ここまでは比較的順調です。」

シャーリー「ライトニングF、8両目突入。……え？……エンカウ
ント、新型です！！」

リニアレール上部

キャロ「フリード！ブラスト・フレア！……ファイア！」

エリオ「とおりやあああ！！……ていあ！っ堅！？」

フィヨンフィヨン、フィヨンフィヨン、フィヨンフィヨン

キャ、エ「え？——「AMF!？」——「こんな遠くまで？」——」

ティグレ「そうだぜ？AMFだ、しかも結構強力なやつな？さあお

前らはどう対処するんだ？」

エリオ「そんな……無理だよ、兄さんお手本を見せてください。」

ティグレ「はあ？こんなやつも倒せないのか？こういう奴はな？オプロ、フォームランス」

オプロ「了解した。」

ティグレ「一機しかない場合は魔力を限界まで上げて敵のAMFを弾き飛ばすくらいじゃないと。」

エリオ「僕の魔力では無理があるよ……他の方法は？」

ティグレ「後はあれだなお前は速さが売りなんだから、AMFを食らう前にぶっ壊す。こんな風になー!!」

シュン!!……バスンッ!!……チュドーン!!

エリオ「凄い……」

ティグレ「まあこれじゃあサポート側じゃなくなったけどな？後の……処理……は……頼むぞ？」

ギョオンッ！！グラグラグラグラ！！

ティグレ「何！？地震！？……はやて！！」

はやて「今解析中や！！ちょい待ち！！」

シャーリー「解析結果出ました。南西方向3.2 kmに大きな次元の亀裂が発生した模様です。」

ティグレ「なら俺がちょっとひとつ走り行ってくるぜ！」

はやて「ティグレ一人で大丈夫か？」

ティグレ「大丈夫だってしかも、俺一人じゃないし。なあクオン？」

クオン「そりゃあそうやわ、だからはやてさんもそんなに心配せんでもエエよ？」

はやて「何かティグレを取られるようで良い気はせんけど、今回の件はティグレとクオンに任すわ。しっかり調査してきてな？」

ティグレ「了解だぜ！マイハニー！

ってことだから、後の処理は任せたぜ？時期にリインも来るからな！」

エリオ「その……兄さん？……絶対帰ってきて下さいよ？」

ティグレ「何言ってるんだよ、俺はいかなる状況でも戦場から帰ってくる男だぜ？」

キャロ「どうか無理はしないで下さいね？」

ティグレ「ああ、二人とも、ありがとうな？」

じゃあ、行ってくるぜ！」

そして俺はクオンと二人ですぐさま亀裂の出ているところへ向かった。

南西3.2 km地点

ティグレ「これだな？次元震を起こした奴は、それにしてもでかい亀裂だな、横の長さ5m位あんじゃないのか？」

クオン「まあちやっちやと済まして我が家に帰りましようや。」

ティグレ「まあそれは賛成だな。つー訳でちやっちやと調べ……うお！！！」

ヒョンヒョンヒョンヒョン！！
ブォーンッ！！ブォーンッ！！

ティグレ「何だこれ？凄い勢いで吸われてるぞ？」

クオン「このままじゃ亀裂の中に入ってしまうんじゃないの？」

ティグレ「だが……こんなの……どうしろって……うわああああ！！！」

クオン「キャ————！！！！」

Side…???.???.???

???? 「クックククハッハッハ、最高に面白いじゃないか。

まさか、ここまで上手いくとは思わなかったよ。

ティグレ・イルシオン、最高に面白い男だ。

私の研究には必須な男だな。」

???? 「ドクター、最近はこの男の事を凄く熱心に調べてますよね。」

???? 「それは、そうだ。これだけ面白い人材はいないよ、見るだけで研究意欲が湧いてくるよ。

今後もこの子に期待しよう。」

第31話 「ファースト・アライト後編」 (後書き)

どうもハルジオンです。

中々の展開だと私は思いますが、自分で納得いかないのも少々
流石に凄く良い出来の物を作りたいのですが、出来ないのも現状で
あって……

さて、次の話は次元の亀裂の中に吸い込まれてしまったティグレと
クオン、

一体あの亀裂は何故出来たのか、真相はこれから話です。

では、次の時に（＾Ｏ＾）／

第32話 「次元の狭間の先の先」

ティグレ「ここは、何処だ？」

俺は無重力空間の中にいるかのような感覚が全身を覆う。

俺が何故このような所にいるのかさえ考えられなくなるほど思考が麻痺している。

クオン「マスター、しっかりせえ！此方の声が聞こえないのかえ？」

ティグレ「……………」

クオン「あかん、全然聞こえてへん。これは何とかせなあかな。」

ティグレ「何か凄い心地よくなってきた。」

このままずっとここにいてもいい気がしてきたぜ……

クオン「仕方あらへん、この手は使いたくなかったんやけど状況も状況や」

するとクオンの手元から膨大な魔力の塊がまるで雷球の様に丸く纏まっていくな。

クオン「マスター、ちょっと痺れるけど我慢してな？」

何とそれをためらいなくティグレに投げつける。

ヒュンッ！！……バチンッ！！ビリビリビリッ！！

ティグレ「うっぐああー！！」

クオン「マスター！！！気づきましたか？」

ティグレ「ゴフッ！！……ハア……ハア……ああ、バツチリ目が覚めたが、死ぬかと思ったよ。」

クオン「すんまへんなーマスターが中々起きんから……」

ティグレ「あ？ああ、ありがとな？クオン。」

クオン「いえいえ、とんでもないです。」

ティグレ「んで？ここは何処だ？」

クオン「多分次元の亀裂に吸い込まれて……ですから次元空間の中かとおもいます。」

ティグレ「さて、一体俺達は何処に向かっているのか、過去か、未来か、現在か……」

クオン「まあ着いたら分かると思いますが、一応警戒体制にはしといってくださいね？」

ティグレ「分かってるよ。……っと、そろそろ出口みたいだぜ？」

俺達は目の前の光に吸い込まれるようにこの場所を出された。



俺達が着いた場所……

ティグレ「何処だ？ここは……」

おいおいマジかよ、何もない荒野っぽい所に着いたぞ？
しかも何か血生臭いし

クオン「何だか私の中に流れる血が疼いてきました！」

ティグレ「確かに疼くが……っとちょっと上へ上がれ！」
そう言っただけで俺達が上に上がった瞬間に下で爆発音が聞こえた。

????「ちっ、外したか。」

ティグレ「いきなり突っ込んで来るとか、頭どうかしてるんじゃないか？」

????「ウルセエ！てめえには関係ねえだろ！」

ティグレ「ごもつとも。で、御聞きしますがここはどこで貴方は何者ですか？」

????「はあ？お前は何を言ってるんだ？ここは戦場で、俺は覇

王の兵士だぜ？」

霸王？……………（思考中）……………っは！？って事は何か？俺は今古代ベルカ戦争の真っ只中に来ちまったって事か？冗談じゃねえよ、面倒臭いところに放り出しやがって！しゃあない速攻で蹴りつける。

霸王兵士A「んじゃ、そろそろ死んで貰えるか？」

ティグレ「何を言ってるんだ？お前はもう斬られてるじゃないか。」

霸王兵士A「え？視界が……バタツ」

ティグレ「ふう、リミッターは外れてるみたいだな。……クオン、これからどうする？」

お前の生きてた時代なんだから、行くところはお前に任せるよ。」

クオン「ほんなら、聖王の所にも行きましょう。此方の仕えてた場所ですから。」

ティグレ「了解だぜ！……って聖王の城は何処にあんの？」

クオン「少々お待ちを……（魔力探知中）……あっちです！大体此処から20km離れた場所です。」

ティグレ「じゃあ速攻で行きますか！」

30分後

ティグレ「あれか？」

俺の目に入ってくるのはやけにデカイ城（ベルサイユ宮殿の8倍程）を見てクオンに聞く。

クオン「はい。そうです。200%間違いない。」

ティグレ「それにしてもでかい城だな。」

クオン「まあ、街と城が合体してますから仕方ないっちゃいますか？」

ティグレ「まあ良いや、とりあえず城門から入るか。入れてくれるか心配だけど……」

城門前

ティグレ「聖王オリヴィエな会いに来た。ここを通してくれ。」

門番「素性の知れないやつを入れるわけにはいかん、帰れ！」

ティグレ「入れてくれないなら力ずくでも通してもらうぜ。」

門番「そんなひ弱な体で俺に勝てると思ってるのか？」

ティグレ「ああ勝てるね。そんなこと言ってるやつは大抵弱い。」

門番「このガキ！……これでも食らえ！フンッ」

ヒョイ！

ティグレ「なにその大振りの殴りは、戦う気あんの？」

門番「これならどうだ！」

門番が放った一撃は確実に音速を越えていたがティグレは何事も無かったかのように回避してみせる。

ティグレ「な？これで分かっただろ？おっさんと俺では天と地の差があんだよ。」

門番「認めんぞ〜！」

ティグレ「はあ、仕方ないじゃあ死んでくれ」

そう言った瞬間、門番の体が四方八方に飛び散った。

ティグレ「さあ、中に入ろう。」

クオン「本当にこんなことやってもエエんやろうか。何やあのおっさんが可哀想になってきたわ。」

ティグレ「なに言ってんだ！人を殺すのがこんなに楽しいのに。クツクツク……」

クオン「何やマスターの人格が変わってるわ。恐ろしいったらありやせんわ。」

そして俺達は止められた兵士達をぶち殺しながら聖王の間迄辿り着いた。

クオン「お久しぶりです。聖王オリヴィエ。」

オリヴィエ「クオン！？本当に貴女はクオンなの？」

クオン「はい、クオンにございます。」

オリヴィエ「ああ、まさか生きていたなんて、今まで何処で何をしていたのです？」

クオン「はい、話は長くなるのですが……」

クオンは今までの経緯を順に話していった。

オリヴィエ「それでは何ですか？貴女は未来から来たとしても申すのですか？」

クオン「まあ私とこの人もですけど。」

ティグレ「どうも。」

何かこの人どことなくアルトリア王に似てるな〜
ん？何でアルトリア王を知ってるかって？それは後の楽しみさ！

オリヴィエ「ではそなたがクオンを助け、介抱してやっている？」

ティグレ「まあそんなとこだな！」

クオン「おいマスター！もう少し口を慎め！バカ者。」

オリヴィエ「よい、……して、城の兵士を殺したのもそなたか？」

ティグレ「ああ、弱すぎて話にならなかったけどな。」

オリヴィエ「そなたは相当強いようじゃな？良しそなたに折り入って頼みがあるのじゃが聞いてはくれぬか？」

ティグレ「報酬によるかな？」

クオン「おいWWWマスターいきなりそんな事言っちゃあかんやろ！」

オリヴィエ「なら、お主の欲しいものをやろう。」

ティグレ「……………それは何でも良いんだよな？」

オリヴィエ「ああ、妾は嘘はつかん。二言はない。」

ティグレ「頼みの内容は？」

オリヴィエ「この戦争を終わらして欲しいのじゃ。」

ティグレ「本当にそれで良いのか？」

オリヴィエ「お主は意図も簡単に出来ると申すのか？」

ティグレ「少し強引なやり方だが行けるさ！」

クオン「ちょっと待てマスター、まさかあれを召喚するわけではあるまいな？」

ティグレ「なに言ってるの？召喚するに決まってるじゃん？報酬は何でも良いって言ってんだぜ？やらないわけにはいかないだろう！」

クオン「マスターは死ぬ覚悟でやるんか？」

ティグレ「大丈夫、俺は死なない。安心しろ。」

オリヴィエ「話はまとまったのか？」

ティグレ「ああ、明日になったらやってやるから寝るところを用意してくれねえか？」

オリヴィエ「生憎全ての部屋は……空いていなくな……その……妾の部屋に……と……特別に案内してやろう」

顔を真っ赤にして言っている聖王
これもまた可愛いものである。

ティグレ「照れちゃって、可愛いねえ！」

オリヴィエ「っな！？て……照れてなどおらにゆわ！？」

ティグレ「囁んでるし。じゃあ案内してもらおうか？」

オリヴィエ「わ……分かっておるわ！」

そして俺達は聖王オリヴィエの部屋で一夜を過ごした。

え？何かしたのかって？それはご想像にお任せします。

第32話 「次元の狭間の先の先」 (後書き)

ども、ハルジオンです。

やっぱりオリジナルを書くのは楽しい！

でも読者の皆様から見たら駄作でしようがちゃんと見てやってくだ
せえ。(へ人へ；)

さて次の話は古代ベルカ戦争が終わります。

原作ブレイクしまくりですがお楽しみ下さい。

第33話 「終戦と世界移動」

永き夜は終り、月と太陽が交差する時、主と従者が契約を交わし、戦争は終りへと近付く。

時の戦士は悪魔を操り、この世を闇に染めこの戦争を闇へと葬り去る。

ティグレ「っていう諸説が未来で今の古代ベルカ戦争の事が記されているものがありました。」

オリヴィエ「ほほう、そなたは大変博識じやのう」

クオン「そうなのです。我がマスターは色々と物知りなもので。」

オリヴィエ「流石クオンが見込んだ男よのう。」

ティグレ「多分、この伝承が正しければ、今日この戦争は終わります。」

オリヴィエ「何故にそのような事を言えるのかの？」

ティグレ「そんなの決まってます。俺が終わらせるからです。」

オリヴィエ「この永きに渡った戦争をお主一人で終わらせると申すのか？それは傑作だのう。」

ティグレ「ですが事実ですから。」

オリヴィエ「何故お主はそこまで自信満々なんじゃ？」

ティグレ「まあこれからのお楽しみつつう事で。」

そして俺は聖王の城の頂上まで上がる。

ティグレ「詠唱開始」

《・我は死を司る者なり》

《・ここに誓うは全ての救い》

《・ここに誓うは全ての死》

《・我、この命を糧に召喚しよう》

《・私の召喚に応じるならば答えよ》

《・魔魂召喚！！死神の皇》

《・ディオス・デ・ラ・ムエルテ！！》

呪文を唱え終わった後、空が黒い雲に覆われ迅雷が降ってくる中、黒い雲の渦の中心から黒い物体がゆっくりと降下してくる。

ディオス「我を呼んだのはお前か？ 雑種。」

ティグレ「まあ雑種ではないが俺の戯れに付き合ってくれや。」

ディオス「ふむ、我も暇をもて余しておった所だ。退屈しのぎにはなるのだろうか？」

ティグレ「ああそこは心配なくて良い。十分な余興だろうよ」

ディオス「ならば我は何をすればよい？」

ティグレ「まあ手っ取り早くこの戦争を終わらしてくれや。」

オリヴィエ「これは驚いた。まさか召喚魔法まで使えるとは、そなたは何処か古い一族の末裔か何かなのか？」

ティグレ「いえ、俺は自分の力でこいつを使役しているのです。つと、誰か生き残してほしい奴はいますか？」

オリヴィエ「妾は全員の平和を望んでおる。だから全てを残して戦争を終わらせてくれぬか？」

ディオス「それは現在の戦争の事を書き替えれば良いのか？」

オリヴィエ「そうじゃ。」

ディオス「それではしばし待たれよ。マスターと話をする。」

ティグレ「俺がお前に改竄データを送るからそれを全発信すれば良いか？」

ディオス「それならば話は早いな、なら早速やれ。」

俺は此処古代ベルカ時代の長い長い戦争を終わらせる為に頭の中で改竄データを作り俺の召喚獣ディオスに改竄データの思考を送った。

ディオス「ん？ああ来たな、では早速発信するでしょう。」

そう言った瞬間にディオスを中心に世界が変わっていくのを感じた。世界が闇に染まっていくのを目の当たりにしたオリヴィエは

オリヴィエ「これは本当に大丈夫なんじゃないかな？」

ティグレ「まあまあ、少しは落ち着いて。」

オリヴィエ「じ、じゃが———は！？ 妾は何を？」

ティグレ「さて、早速効いてきたみたいだな。これでもう大丈夫だろう。」

クオン「マスター、貴方は一体皆に何をしたんや？」

ティグレ「何って、簡単だよ。俺がこの時代が平和になるようにしただけだよ。」

クオン「あんたはそんな事も出来たんか？ それは凄いな。」

ティグレ「まあこの能力とアイツの召喚には代償が必要だからこれでおあいこって事だな。」

ディオス「全発信が完了したぞ。次呼ぶときは戦闘を期待する。」

ティグレ「ああ、任せろ。」

そしてディオスは闇に消えていった。

オリヴィエ「本当に世界を平和にしてくれるとは思ってもみなかったぞ。誉めて使わす。おぬしの望みを何なりと言うがよい。」

ティグレ「じゃあ遠慮なく……俺はオリヴィエとの子供が欲しい！」

オリヴィエ「……………はい？ 妾は聞き間違えをしたのかのう。」

ティグレ「だから俺はお前との子供が欲しいんだって。」

オリヴィエ・クオン「え――――！！！！！！！！！」

第33話 「終戦と世界移動」 (後書き)

こんな日まで遅れてしまい誠に申し訳ないです。

今回も原作をブレイクしまくってオリジナルを書いていますがお気に召さなかったらすいません。

次回からも頑張って書きますのでよろしくお願いします。

第34話 「悲しみと希望」

シャーリー「次元の中にティグレさんが吸い込まれていきます!」

はやて「何か助ける方法は無いんか!？」

アルト「最善を尽くしていますが、わかりません!」

はやて「なのはちゃんとフェイトちゃんは?」

なのは「私達も急いで向かってるけどギリギリ間に合わないかも。」

はやて「やっぱり昨日話してた事が本当に起こってしもうたんやな。あんなのはティグレの法螺かと思うてたのに、やっぱり行ってまうんやね……………でも、何処へ行っても絶対探したるからな?」

そう言うってはやては涙がかれるまで泣いた。



起動六課…食堂

食堂はいつになく緊迫とした空間になっていた。

シグナム「……やはり、行ってしまいましたか……こうなることを予測しておきながらこの始末とは、何と屈辱でしょうか。」

ヴィータ「何でよりもよってティグレなんだよ！あたしらじゃ駄目だったのか!？」

はやて「……ティグレは予知してたんや。未来に起こることは誰にも止められない。それが運命なんだから。」

シャマル「でも、ティグレ君がいなくなったって事は起動六課全体の士気が下がりますよね?」

はやて「そうやね、だからなるべく早くティグレを見つけてお説教してやらんといけんからな！」

side..ザフィーラ

説教と言ったはやての目がキラツキラに輝いて見えたザフィーラは焦りながらも……

ザフィーラ「……なんだか主がやけに燃えているんだが……どう対処した方がよいのやら。」

ヴィータ「こういうのはあたし達も参加するもんなんだよ！」

ザフィーラ「……ちょっとまで、何故そうなる？そして何故全員やる気満々なのだ？」

シグナム「ティグレに肅正……じゃなかった、心配だから私達は主はやての指示に従うだけです。」

ザフィーラ「おい、今肅正って言わなかったか？俺が聞き間違ったのか？」

シャル「何言ってるのよザフィーラ、そんなこと言ってないでしょ？……ウフフフ。」

ザフィーラ「シャル、お前のその手に持っている毒々しい物は何だ？

まさかそれで口封じとかは無いよな？」

はやて「まあまあ、そんなことよりもどうやってティグレを見つけるか皆で話し合おうやないの。」

side…ザフィーラ了

なのは「興味深い話だね？私達も交せてくれる？」

はやて「なのはちゃん、フェイトちゃん！こんな時間までどないしたん？」

フェイト「ちょっと用事でこんな時間になって食堂の方で声がして来てみたら、はやて達がいたって訳。」

はやて「本当にお仕事おつかれさんや。」

なのは「そんなことよりも何か楽しそうなこと話してなかった?」

ヴィータ「おう! ティグレが一人でどっか行っちゃったから、皆で探して説教してやろうぜって話なんだよ。」

なのは「ヴィータちゃん楽しそうだね。」

シグナム「それはそうだろう、ティグレがいるといたないとはどれだけこの起動六課の仕事が増えることか……特に事務仕事はお前たちもあまりないだろう?」

フェイト「確かに言われてみれば、簡単な書類仕事だけですな。」

シグナム「それは全部ティグレがやってくれているから私達は訓練にも集中出来るんだ。」

なのは「てことは、ティグレ君は夜遅くまで仕事をして朝は早朝訓練に出てるってこと?」

ヴィータ「ティグレは1時間寝れば体力だけはMAXになるらしいからな。」

はやて「ティグレの体の構造的にも大丈夫なんよ。だから安心して任せられるんよ。」

なのは「でも凄いよね？ティグレ君は、そんなことまでやってるのに弱音を一つも吐かないなんて。」

ザフィーラ「アイツは女性に無駄な時間を過ごしてほしくないらしい、だからお前らには仕事が少ないんだ。」

シャマル「何か随分ティグレ君の事知ってるのね？」

ザフィーラ「それはそうだ、昔からアイツとは男の話をしていたからな。」

はやて「それは気になる話やな？詳しく教えてもらえへん？」

ザフィーラ「……い、いくら主の命でもそれは勘弁を……他にもやることあるでしょう。」

はやて「まあその話は後でもええわ。今はティグレを探す事やからな。」

ヴィータ「案外ひょっこり出てきたりしてな？」

シグナム「そうだと良いのだがな。存分アイツの心の奥は理解できないからな……」

そうシグナムが言った後、食堂は静まり返った。その後誰も言葉を発言する者はいなかった。

第34話 「悲しみと希望」 (後書き)

本日は投稿が物凄く遅れてしまい、誠に申し訳ございません。
どうもハルジオンです。

最近になり頑張って書こうとは思っているのですが、中々思うように書けないのも事実ではない…
でも頑張って書こうと思いますので、例え投稿が遅れても許してくれると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2439t/>

魔法少女リリカルなのはStrikers～ずっと・・・君と・・・～

2011年11月17日05時40分発行